

Kyoritsu Brochure

共立パンフレット

number 008

Tokyo Christian University | Kyoritsu Christian Institute

21世紀に甦る賀川豊彦・ハル

東京基督教大学 | 共立基督教研究所

contents

21 世紀に甦る賀川豊彦・ハル

- 01 開催主旨 稲垣久和
- 03 基調講演 **あらゆるものを全体から見る姿勢——「科学的な神秘論者」と「芸術家」である賀川豊彦**
トマス・ジョン・ヘイスティングス
- 27 パネルディスカッション 発題
- ① **賀川豊彦の復権——民主的で平和な世界のために** 金井新二
 - ② **労働組合、協同組合、NPO の連携** 篠田 徹
 - ③ **豊彦とハルのパートナーシップ** 岩田三枝子
- 42 ディスカッション
金井新二×篠田 徹×岩田三枝子+稲垣久和+会場参加者
- 52 **あとがきに代えて——『宇宙の目的』で伝えたかったこと** 稲垣久和

日時 2015 年 3 月 14 日 (土)

会場 明治学院大学白金校舎 三号館 3203 教室

開会挨拶 永野茂洋 (明治学院大学教授) / 総司会 杉浦秀典 (賀川豊彦記念松沢資料館副館長)

共催 東京基督教大学 共立基督教研究所、明治学院大学 キリスト教研究所 賀川豊彦研究プロジェクト

協賛 賀川豊彦記念松沢資料館、キリスト新聞社

本号は、John Templeton Foundation (<http://www.templeton.org/>) の助成を受けて行われた研究プロジェクト Science for Ministry in Japan: The Theory and Practice of Christian Ministry in the Face of Natural Disasters 震災後の日本における宗教的ミニストリーの理論と実践 (2014 年 4 月- 2016 年 12 月 <http://www.tci.ac.jp/smj/>) の第 1 回賀川豊彦シンポジウム「21 世紀に甦る賀川豊彦・ハル」の記録を編集したものです。

注記のある場合を除き、本文中の出演者のご所属や関連データ等の情報はすべてシンポジウム開催時点のものです。

本文中に記載されている主張・見解は John Templeton Foundation の主張・見解を表すものではありません。

This project was made possible through the support of a grant from the John Templeton Foundation.

The opinions expressed in this project are those of the members and do not necessarily reflect the views of the John Templeton Foundation.

本号の PDF データは <http://www.tci.ac.jp/kcibrochure> よりご覧いただくことができます。

また本シンポジウムの映像記録「21 世紀に甦る賀川豊彦・ハル」(ロゴスフィルム制作) はストリーミングにより有料配信されています (<https://vimeo.com/ondemand/kagawa>)。

開催主旨 稲垣久和

賀川豊彦献身 100 周年の 2009 年にさまざまなシンポジウムやイベントが、関東・関西各地で行われました。そのなかで、21 世紀に向けての新たな賀川解釈が出てきたかなんと思っています。それらを踏まえつつ、今日はまた新たな一步を踏み出したいというビジョンを掲げております。

賀川豊彦・ハルの膨大な働きを、今、どのように継承していくか、これは我々にとっての大きなチャレンジですが、私たちは、戦後思想、とくに戦後の市民思想と市民社会運動との関連での賀川の位置づけを主題にできないかと考えているのです。具体的には、賀川が市民的公共性を形成していくためのモデルを提供したということです。いわゆる「新しい公共」という言葉がよく聞かれますが、そのなかで、この賀川思想の根幹にある「友愛と連帯」、そして「平和な市民社会」、この 21 世紀的な、とくに日本を舞台にしたそのような民主主義思想の形成を、再解釈し、継承していきたいと思えます。

戦後 70 年が経ちました。1945 年の 8 月 15 日、いわゆる敗戦の日であります。このときからすでに賀川豊彦は、ものすごい勢いで全国を駆け巡り、旧無産政党的再興などで新しいビジョンをもちました。9 月 22 日に東京で旧無産政党的各派の大同団結の集会をもち、彼は主催者側としてこういう演説をしております。

我々は連合国から強ひられて民主主義的形態をとるのではなく我々の手で奪ひ取らねばならないものである。我々はこの無産政党的が起っても道義的に退廃するものではあつてはならず、世界平和からひいては世界国家を建設する指導者となる程の気構へがなくてはならない。この意味で私は世界に向かって武装解除を要求する権利がある。¹

これは、1945 年 9 月 22 日というその日を考えると、驚くべき先見の明のある演説だと思えます。当時の「東京新聞」の一面にこの演説が掲載されましたが、すでに翌年に出来る日本国憲法の精神をここで先取りしています。たとえば「国民の総意にもとづく憲法の民主主義化」「軍備撤廃。世界恒久平和」というようなことですね。私は『改憲問題とキリスト教』²という本を 1 年前に出版しましたが、その前書きでこれを引用しました。憲法は決して「押しつけ」ではない、と。

それで、戦後民主主義はここからスタートし、今どういうかたちになっているかというのは、大変興味があります。60 年安保を経て 1970 年頃から、本日問題としたい「新しい公共」に近い概念が政治学者から議論されてきました。1975 年に『市民自治の憲法理論』³を刊行された松下圭一さんが、別の著書でこのように述べています。

日本での公共概念は、明治以降は国家観念と同義とみなされたのだが、この

- 1 原秀成『日本国憲法制定の系譜』第三巻、日本評論社、2006 年、207 頁
- 2 稲垣久和『改憲問題とキリスト教』教文館、2014 年、6 頁
- 3 松下圭一『市民自治の憲法理論』岩波新書、1975 年



賀川豊彦・ハル夫妻（1957 年頃）

国家観念の崩壊した今日も、個別・具体の「政策・制度」のつくり方とむすびつかないため、公共論それ自体として、かつての国家論とおなじく、いまだに空虚な言語遊戯となっていることに留意したい。

公共概念は、市民自治を基軸に、地域規模から地球規模まで、多元化・重層化する政策・制度ついで法務・財務の次元にまで深化されるとともに、たえざる市民活動、市民世論の合意によってのみ検証される。この論点は、今後、市民による組織・制御が不可欠のだが、IT をふくむ「市民情報流」がさらに増幅していく。⁴

ここで「公共概念の転換」ということを彼ははっきりと宣言していると思います。今まで「旧い公共」(＝公)があった。これは国家、お上、政府、場合によっては天皇ですが、これがずっと戦後まで続いたわけです。しかし、ここで公共概念の転換が起こって、「新しい公共」が宣言されています。これはその後のいわゆる地方分権であるとか、さまざまなかたちでの市民参加の民主主義という風潮を生みだしてく契機となったのです。

こういうタイプの自治による「新しい公共」の形成は、まさに賀川豊彦・ハルが戦前から考え、実践してきた思想ではないかと私は思います。そういうことで「新しい公共」、それはいわば「友愛と連帯」にもとづく市民社会ですが、そのような発想がすでに戦前から賀川思想のなかに孕まれていた、いや賀川はその先駆者だと位置づけたいと思います。

松下さんたちは、「新しい公共」への転換として、行政学サイド、そして地方自治サイドでいろいろな働きをされました。そしてこの方面の市民運動も手伝って、2000年にさまざまな機関委任事務廃止が法律で決められ、地方分権が進んでいます。しかし問題は、そういう制度的な転換ではなく、「新しい公共」への転換を担う担い手、つまり人間の思想が問題なのです。その「新しい公共」を担える人間とは誰なのか？

ここを私たちは今日とくに主題としていきたいし、それがまさに賀川思想が私たちに投げかけている根本であろうと思います。新しいかたちでのモラルの形成、「友愛と連帯」の市民社会の形成の根底にある人間のこころ（伝統的な儒学的表現を使えば、良知、良心）の問題です。モラルの問題、道徳の問題、場合によっては回心をも含む人間主体の変革の問題です。それをいわゆる行政学や政治学は十分に扱うことができません。それで「新しい公共」を本格的に担う担い手を育てる。我々自身がまずそのようなかたちで意識化していく。これを賀川思想から私たちは学びたいと思うのです。

この後のプログラムで、賀川豊彦の友愛的モラルがどこから来るのか（トマス・ヘイスティングス氏）、生命宗教論と創造（金井新二氏）、多様な市民運動の連帯と統一（篠田徹氏）、ハルとの連帯——すなわちパートナーシップ（岩田三枝子氏）、について最新の研究内容を伺ってきたいと思います。

- 4 松下圭一「転換期日本の政治と文化」岩波書店、2005年、217頁。また西尾・小林・金編『自治から考える公共性（シリーズ公共哲学 第11巻）』（東京大学出版会、2004年）の松下の所収論文「公共概念の転換と都市型社会」にはその要約がある。



稲垣久和

基調講演

あらゆるものを全体から見る姿勢 「科学的神秘論者」と「芸術家」である賀川豊彦

トマス・ジョン・ヘイスティングス

Thomas John Hastings

今日は賀川豊彦について、私なりの研究の成果を簡潔に、本当に概括ですが、紹介させていただきたいと思います。『宇宙の目的』という極めて珍しい賀川の著作があります。この『宇宙の目的』が創造された背景とプロセスを理解しようとして、3年ほど前からの私の研究テーマは、最終的に賀川豊彦における科学と宗教の理解に集中してきました。

ご存知かもしれませんが、40年ほど前から欧米では、科学と宗教の対話が非常に盛んです。ところがアジアにおいてそれは、さほど熱いテーマではないのです。しかし非常に珍しいことですが、賀川は早い段階で、そして生涯にかけて自然科学への関心を示し、自分なりに勉強しながらキリスト教との対話を独自に展開していきました。

昨年、賀川の最後の著作『宇宙の目的』を *Cosmic Purpose* として英訳しました⁵。日本では、この本を英訳する価値があるのか？と疑問をもつ方もいるかもしれません。しかし私は日本語で読んで、英語に訳す価値がきっとあると確信しました。私のみならず、英語の原稿を何人かの自然科学者——化学者・物理学者・心理学者などに見せたところ、「えっ、日本にこういう本があるのか」とびっくりされて少しずつ読まれるようになりました。どれほど評価されているかわかりませんが、とにかく翻訳によってアジア、日本からの声が、科学と宗教の対話に加わった意義があると私自身は思っています。

I 導入——『宇宙の目的』という謎を解く試み

しかし、この本で賀川がなにを言っているか、読んでもすぐにはわからないと思います。私自身、賀川がなにを、どういう意図でそういう著作を書いたか、なかなか理解できませんでした。しかし、少しずつ、そして他の著作とともに読むことで、だんだんとその意図が明確になってきました。

最初に『宇宙の目的』から、多少難解なのですが、いくつか引用をして、味わっていただきたいと思います。

探求の動機：「宇宙悪」の問題

太平洋戦争が始まる少し前から、私は宇宙悪の問題を宇宙目的の角度より見直し、宇宙の構造に新しい芸術的興味を感じるようになった。私は宇宙の構築に神秘的発展が、まだ進行中であることを深く感じる。それで、私は、それに結論を出すことをいそがないで、宇宙の一大演出をただ見ておきたいと思う気がする。しかし、私があまりひとりで考え込んでいることも周囲の人々にすまないで、私の宇宙の見方の一端をここに発表し、宇宙芸術の味わい

5 Toyohiko Kagawa, *Cosmic Purpose*, edited by Thomas J. Hastings, translated by James W. Heisig, Eugene: Wipf and Stock Publishers, 2014. (原著『宇宙の目的』毎日新聞社、1958年)：以下の同著作からの引用は『賀川豊彦全集』第13巻(キリスト新聞社、1964年)より。また電子書籍版として『宇宙の目的』(国際平和協会、2015年)が刊行されている。



トマス・ジョン・ヘイスティングス

方を世界の人々に知ってもらいたいと思うのである。〔「序」から〕⁶

6 『賀川豊彦全集』第13巻、291頁

7 『賀川豊彦全集』第13巻、399頁

ここには2つのキーワードが出てきます。ひとつは「宇宙悪」という言葉です。賀川はとてつらい少年期、青年期を過ごして、自ずと生きる価値、生きる意味が問われて、非常に深い悩みを経験しました。「なぜ、こういう不条理が自然界にも起こるのか」という課題を、生涯を通して解いています。しかし、ここは大事なポイントですが、賀川は自然科学に非常に、強い関心がありました。しかも科学者ではなく宗教者として。ここに「芸術的興味」「神秘的発展」「宇宙芸術の味わい方」という言葉が出てきますが、そういう言葉は、この著作が宗教者として自然科学について瞑想する作品であるということを示している、そういうふう理解していただければと思います。

賀川の「目的論」——累推的發展

目的の実現には、どんな簡単なものでも、力、化、成、選、法の五要素を必要とする。この五要素に相補的なものではあるが、目的への出発はまず、力をもって始まり、その力が変化を受け、目的へ成長し、各種の障害を排除し、目的への最もよき道と方法を選択し、周囲の事情、環境との調節、また力を目的ののび上がらしむる各種の約束と条件を守らねばならない。生命の世界においては、これらの五種の要素が総合的に生命力発揮の要素となっている。意識世界においては、五要素に生命力を加えて六種の要素が自決目的の礎石となる。⁷

見出しに「累推」という言葉がありますが、これは賀川自身が造った言葉で、広辞苑にもないのです。これが合っているかどうかわかりませんが、私なりの解釈は次の通りです。

累推的發展（定向性）：あらゆるものが集積して、力、化、成、選、法の五要素のプロセスを経て、一つの方向に向かって推進されるという意味。

賀川は『宇宙の目的』でも定向性、あるいは方向性についてよく触れています。これはどちらかというとな賀川なりの哲学と言えるもので、賀川は、自然界やキリスト教の教理、教えなどで、いつもこの五つの要素で把握して見ているのです。一つひとつ見るとバラバラであるが、まとめて見るとそうではない、方向性がある、定向性がある。モノがなにかに向かっていく、すべてあらゆるものが一つの方向に向かっていく、そういう考え方です。

相対的偶然論「変転のずれ」

空間的に偶然として現われる現象も、時間的には時間的整序性をもち、時間的に偶然とみえるものが、統計的法則によって整序性を保っている。要するに、宇宙間における偶然と思われる出来事も、絶対的偶然ではなく、法則、変化、選択、そして特に生成の範疇等によって、構成せられた世界において、

必要性をもって生れた「変転のずれ」であるといわねばならない。

この必然性は合目的性をもつ生成の一基準を形成するための、必須条件を含んでいる。

こうした「ずれ」が起ることはけしからぬというかもしれない。すべては機械的に完全に運行されるべきだとある者は要求するかもしれない。だが、高次元的分化、総合の自由度の与えられている世界において、各方面の要素が出揃わないことは初めから計算に入れなければならない。

このような錯綜のあり得ることを初めから考えて、宇宙悪としての「ずれ」を認め、その「ずれ」の部分を修繕する修理、再生の原理も、宇宙間に伏在しているのである。この信仰が宗教の領域である。

しかし、考えようによくと、この「ずれ」があればこそ、変転自在な組み合わせを通して、新しき世界の創造も可能なのである。⁸

これも非常に難しい言葉ですが、賀川が言おうとしているのは、自然界には「ずれ」があると。つまり、ここに向かっていくべきなのに、しかしなにか「ずれ」があつて方向が変わってしまう。そのなかでは人が死ぬとか、病気になるとか、災害が起こるとか、非常に宇宙悪が表現されているのですね。これは一つひとつ見るとバラバラで、全然意味も目的もないように見えるわけです。しかし賀川は、それは絶対的偶然ではないという確信をもっている。それはどこから来るかという、キリストの十字架にほかならない。ここで言っている、修繕の原理、再生の原理、これは宇宙間に伏在する。キリストに顕れている十字架の贖罪愛は自然界にもある、と賀川は見ているのです。これについては後で説明します。

宇宙悪よりの解脱救済の道——

インドの虚無思想、西欧の有神的救済の道、と近代科学思想

宇宙悪よりの解脱救済の道を、昔から人間は三つの角度から考えた。第一はインドの宗教の形式、すなわち、虚無思想である。第二は西欧思想として発達した有神的救済の道である。第三は近代科学思想による宇宙悪の追放である。

私は、この三つの思想はたがいに対立するものでないとする。これらは人間の意識の上に発生するものである。西田幾多郎博士は、「無」の思想の意識的効用を認めた。代数的に中世紀のクザのニコラスもこの「零」を認めた。近代量子力学のハーマン・ワイルもクザのニコラスと同じ思想をもっている思想家である。虚無は排除してよいが「零」を選択として使用し、思想としての宇宙悪を除去せよと私はいう。また第三の科学的悪の追放も、近代の意味において極力努力する必要があると思う。⁹

賀川は東洋思想に対して非常に積極的、オープンです。日本のプロテスタント教会は、そうした傾向は弱いのです。私は東京神学大学に長くいましたからよくわかりますが、日本のプロテスタント教会においては、いわゆる日本

8 『賀川豊彦全集』第13巻、413頁

9 『賀川豊彦全集』第13巻、454頁

の伝統的な思想、宗教とどのように対話するかは、なかなか難しい話です。避けたほうがすっきりする。そういう傾向が日本では非常に強いのです。賀川はそうではない。この引用では、単に Interreligious Dialogue（宗教間対話）をしようとしているわけではなく、自分の中には「無」の思想も入っているのだと受け入れている。日本人だもの、仏教から逃れられない、ということですね。だからいわゆる西洋の一神教、インドの思想、または科学は、それぞれが宇宙悪に正面から取り組んでいて、対立しているわけではない、と賀川は言うのです。この主張は、日本の神学界ではあまり歓迎されませんでした。それに対して賀川はそれは違うと言っています。多元宗教時代の今日、宗教がより深くお互いを理解しなければならないなかで、賀川はいろいろな示唆を与えてくれるのです。

出発目的論

次は私見ですが、『宇宙の目的』で賀川はなにを意味しているかということです。

賀川による「出発目的論」は「ただすでに述べたように、出発目的と、究極目的とを区別した場合、究極目的の見きわめはつかないが、出発目的の構造が少しわかるので、それによって判断すると、次の六つのことがいえる」ということです。

賀川は究極目的については沈黙します。ダンテの第七天国の天使たちとともに主の前にひれ伏して無言です。しかし賀川が出発目的について語ることは、今日、非常に新しい響きがあるのです。

- (1) 宇宙に目的がある。
- (2) 宇宙の目的は「生命」の方向に向いている。
- (3) 「生命」の目的は「心」（意識）のほうに向いている。
- (4) 個性の「心」は社会的、組み立てのほうに向いている。
- (5) その組み立ての社会的「心」は歴史的進化発展と宇宙意識の覚醒の途上にある。
- (6) それは宇宙の創造進化を可能ならしめた精神の助力を待つ方向に向いている。¹⁰

これは神の御助けを待つしかない。賀川はこの本のなかで「神」という言葉は2、3回しか使っておらず、哲学用語として「宇宙の意志」という言葉を使っています。それは、この本をほとんどがノンクリスチャンである日本人に向けて書いているからです。賀川の宇宙の目的論は、ある意味では非常に謙虚です。これくらいは言える、それ以上は言えないと。

見てください。「生命」「心」「社会」「組み立て」、それから「全意識」「宇宙意識」はキリストにあるのですけど、その完成を待つしかない。謙虚です。『宇宙の目的』というのはえらい表題ですけれども、言っている意味は謙虚なのです。しかし日本では誤解されました。

日本のプロテスタントからの声

次に『宇宙の目的』に対する、日本のプロテスタントからの評価をご紹介します。これは皆さん、よくご存知の隅谷三喜男先生の評価です。隅谷先生は、『賀川豊彦』の中で、賀川の社会活動など、彼を高く評価している面がありますが、『宇宙の目的』についてはこう言うのです。

賀川はこの宇宙目的論によって、自然科学から社会科学、さらに神学に至る全領域をカバーする一大思想体系を構想したわけである。しかしながらこの試みは失敗であった。賀川思想は、実践の思想であり、実践を支える力の表現、すなわち、詩なのである。そこには確信があつて、科学的論証が欠けている。かれがしばしば博引旁証する自然科学の論証も、かれに摂取された自然の解釈以上のものではなかった。¹¹

あまり長くは言いませんが、これはちょっとおかしい。なぜかという、賀川自身は科学的論証をしているつもりは全くないはず。先ほどの芸術的関心、芸術的意味、宇宙芸術の味わい方、これはまさに日本の偉大なる宗教者が自然科学について瞑想した作品、本です。ですから隅谷先生には私もお会いしたことがあり、経済学では尊敬しているのですが、残念ながらこの点では先生はズレていると言わなければなりません。

日本のカトリックからの声

それに対してもう一つの声、『宇宙の目的』に対するカトリックからの評価があります。岸英司という方で、こう言われています。

賀川が社会悪とは言わず宇宙悪と言ったことを見逃してはならない。賀川は社会悪の闘士、社会悪の救済者として、彼の生涯は良く知られている。しかし賀川が宇宙悪の探求者として、生涯の極く始めから宇宙的意識をもち、晩年、その集大成ともいべき、「宇宙の目的」を世に問うたその重大なる意義に気づく人は少ない。賀川豊彦こそ日本でただひとりの宇宙思想家である。¹²

江戸時代の儒者たちのなかには、先ほどの中江藤樹もそうですが、いわゆる宇宙論者と呼べるような思想家が実は多くいます。天と地の関係について全体論的にものごとを見ている、そういう宇宙論者が日本には昔いたのです。岸さんは明治期以降、20世紀のことを言っているのです。本当にそうかは別にして、岸さんはプロテスタントは×、カトリックは○と言っています。なぜなのか。それを皆さんに考えていただきたいと思います。

II 料理のたとえ——「職人」と「芸術家」

さて本論に入ります。料理をつくるときにいろいろなアプローチがあると思います。しかし大きく分けると、ある人は冷蔵庫にあるものから始める。ま

11 隅谷三喜男『賀川豊彦』岩波現代文庫、2011年、198頁

12 岸英司「『宇宙の目的』理解のために(1)」(『賀川豊彦研究』第11号、本所賀川記念館、1987年3月、2頁)

たある人は冷蔵庫にはないものから料理を考え始めるでしょう。つまり冷蔵庫を開けて、あるものをもって自分で考え、模索して、あるものから新しいなにかをつくり出す人がいるとすれば、それに対して信頼されてきた料理法に従って買い物に行って必要なものを買って来る人もいます。前者は料理の分野のみならず、広い意味で「芸術家」と呼んでいいかもしれません。後者は「職人」と呼びましょう。

料理が出来上がったとき、芸術家につくられたもの、職人につくられたもの、それぞれをいただくと、印象、反応、応答が当然違います。両方ともだいたい同じような良い味を出せると思いますが、芸術家の作品は味わってみても、どういう材料で出来ているか、なかなかすぐに言葉で言い尽くせないことが多いでしょう。職人の場合は、料理法を見るとちゃんと材料が並んでいますから、直ちにはつきりわかります。味・感覚と言葉・表現の関係が職人のほうは整頓されやすい。しかし芸術家の場合、味・感覚と言葉・表現の関係はそんなに簡単に整頓されているわけではない。いわば職人はその都度納得がいくものを提供してくれるが、芸術家は謎、あるいは秘密を残してくれる。納得がいくにはずいぶん時間がかかる。

執筆について言うと、職人は「散文的直接伝達法」(prosaic method of direct communication) を、芸術家は「詩的間接伝達法」(poetic method of indirect communication) を選択します。西洋の思想史において、キルケゴールは後者の代表です。賀川はキルケゴールによく似ている面があるのです。知覚から認知、認知から統覚までの関係から考えると、芸術家は認知を飛ばして、直観を通じて知覚から統覚に飛びます。

これは私自身の意見ですが、賀川豊彦はもちろん完全ではなかった。しかし、明治後期—大正—昭和初期を生き抜いたキリスト教の伝道者・社会改良者として、近代日本の精神文化の偉大なる芸術家であると思うのです。熊野義孝先生は「詩的キリスト教」と賀川を表現しました。熊野氏は賀川を片付けて棚に上げるためにそう言ったと思いますが、私のニュアンスはちょっと違います。私は、この文化、この社会においては、芸術家の見方が求められていると思うのです。

AD HOC ECCLECTICISM——臨機応変と折衷主義

というのは、賀川は書齋でゆっくり専門書を広げる職人的学者ではなくて、電車に乗り、いろいろな分野の本を急いで読みながら、次の説教、講演、交渉の準備をし、また詩と小説を書いていた芸術的巡回伝道者であり、社会改良者であったのです。つまり、先ほどのたとえで考えると、よく使われていた料理法をあまり気にしないで、むしろ手元にある、与えられたものから次の料理を提供する宗教的芸術家でした。殊に日本の既成プロテスタント教会の伝道方針に逆らって、都会の市民階級、いわゆる教養人をターゲットに絞らなかった。賀川の伝道と社会改良プロジェクトは草の根のかたちで、神戸の新川というスラム街で始まって、最も貧しい人たちの厳しい現実から、さらに労働者、消費者、それから農民を含むようになりました。従って賀川は、

絶えず日本の大衆を想像しながら次の話の準備をした人です。

結果として、『賀川豊彦全集』は24巻ありますが、実際にはその倍くらいの遺稿があるようです。翻訳を含めて生前に300冊以上が賀川の名前で出版されたそうですが、その著作の大半は弟子たちが書き起こした講演・講義・演説・説教・座談会などの記録です。弟子たちが書いたもので、スタイルもそれぞれ違うし、当然、重複または繰り返されているところが多いのです。ですから、これから改めて本当の「賀川豊彦全集」を集めることは非常に大切です、しかし難しい大変な仕事です。

先ほどのたとえで言うと、賀川の著作を読んでも、すぐになにを言っているのかははっきりわかりません。たとえば武田清子のような優秀な学者でも、賀川豊彦の演説を聞いて、次のように評価します。「私は学生時代、有名なキリスト者、賀川豊彦が学校に来るといので、学友たちと胸とどろく期待をもって講演をきいたのであるが、生物学から宗教哲学らしい領域にまで体系なしにとび歩く散漫な話は、どう考えても、何をきいたのかわからず、どうしてこの人がそんなにえらい人なのかわからなくて戸惑った思い出はいまだに印象深い」¹³。これはユーモアを込めて言っていると思いますが、確かに全体から見ると、賀川の著作は、臨機応変、折衷主義に特徴づけられています。私は全てではありませんが、賀川が書いたものの多くを読みました。本当に苦労しました。しかし、時間はかかるとは思います、賀川が遺した断片的な文章を読めば読むほど、また全体的に把握すると、賀川が、どのような宗教概念、哲学、科学論に影響されていたか、だんだんと彼の意図と立場が明確になります。

Ⅲ 賀川の「三角的福音理解」

賀川の記事には三つの中心テーマ、「贖罪愛」「生命芸術」そして「連帯責任」（あるいは「連帯責任意識」）がいつも出てきます（次頁・fig.1）。

「キリストの贖罪愛の論理」を軸とする「人格主義的敬虔観」

最初の「贖罪愛」について言うと、近代自然科学に対する極めて珍しい瞑想作品である『宇宙の目的』をつくりだした賀川豊彦は、キリスト教の「贖罪愛の論理」を軸とする人格主義的敬虔観（Personalist Piety, Personalist Spirituality）に影響されているということです。これはアメリカのボーデン・パーカー・ボウン（Borden Parker Bowne 1847-1910）の思想です。日本人の学者はほとんど読んでいないと思いますが、ボウンの思想には後でまた触れます。

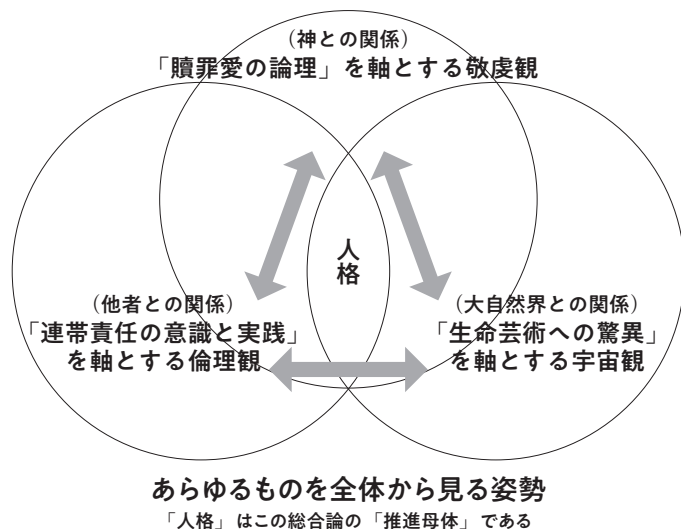
皆さんにチャレンジをしたいのです。なぜ賀川は20世紀で最も有名な日本人のキリスト者であるのに、こういうふうになんとも無視されているのでしょうか。おかしいことです。賀川の批判すべきことは批判しましょう。評価すべきことも評価しましょう。けれども、何人かの学者を除いて、賀川を相手にする人が少ないのです。なぜなのか。とにかく As you can see I'm very

13 武田清子「賀川豊彦の社会思想」（賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦—その思想と実践』新教出版社、2011年、34頁）

passionate about this、私には熱い思いが溢れています。

fig.1 賀川の「三角形的福音理解」

贖罪愛 生命芸術 連帯責任
Personalist Piety, Vitalist Cosmology, Japanese Christian Social Ethic



「生命芸術への驚異」を軸とする「生命主義的宇宙観」

2番目は「生命芸術」です。賀川の宇宙観は簡単です。なぜこの宇宙は「いのち」をつくったのか、その驚きの念。どこを見ても、子どもの目が見るように、青年の気持ちで、生かされていること自体が奇跡だという把握です。自然科学について、こういう説、ああいう説に関心があるわけではなく、化学・物理学・生物学、そして長い宇宙の歴史、進化史、そのなかで、この地球に生命、いのちが現れた。当たり前ではありませんよ。賀川豊彦はどこを見てもその驚きから逃れられない。いわば賀川豊彦の伝道の方針は、同時代の日本人の心の中に、驚き、生きることに関する驚異の念を、もう一度呼び起こす、覚醒させる。そういう目的をもっていたと思います。だからベルグソンなどに関心があるのです。これは大事です。賀川は直観から勉強する。勉強から直観ではないのです。

連帯責任意識と実践

3番目は「連帯責任意識」と実践を軸とする倫理観です。私の言い方をすると、日本の土着型のキリスト教社会倫理です。賀川は絶えずこれら3つの次元を包括して、「あらゆるものを全体から見る姿勢」を目指し、トラウマに満ちた生涯を大衆伝道と社会改良に捧げた、世界の偉大なる芸術家であり、科学的な神秘論者でした。賀川は精神は、日本のもののみならず海外のものでもあり、もっと知られる必要があると思います。マーティン・ルーサー・キングが日本で尊敬されているように、賀川は精神は欧米においても重要です。批判されながらもです。

確かに体系的であるというよりは断片的でしたが、大正期にすでに明確になってきたこの「三角的福音理解」の全体論的なアプローチによって、賀川は近代精神における物質と精神の分裂を乗り越えようとしたのです。本当に乗り越えたかどうかはわかりませんが、その試みでした。キリストの「贖罪愛」とそれに伴う「連帯責任意識」は賀川 of 思想の軸ですが、加えて彼の「贖罪」の理解は個人の救いだけに重点を置くのではなくて、「宇宙的贖罪愛」の理解でした。賀川の著作には、11世紀のアンセルムスの代理的充足論の側面も時折り出てきますが、これはむしろ2世紀のエイレナイオスに帰せられる「勝利者キリスト」、11-12世紀のアベラールの「道徳的模範論」の両方の論を反映していて、いわば近代科学的な意味合いにおいての神につくられた「いのち」と「いのち」の修繕・修正と再生を強調する、極めて積極的、また広い「贖罪」の理解をもっていたのだと思います。

「贖罪愛」の他に、賀川のもうひとつのキーワードは「連帯責任」ですが、その意識というのはこういうことです。我々がキリストご自身の贖罪愛による仲保的な御業に参加して、キリストに倣い、人がなにか悪いことをしてしまった場合でも、自分がその悪いことをしたように責任をもって補っていく。そのような、かなり目標の高い、しかも日本の思い遣り文化に沿った土着型のキリスト教社会倫理であったのです。

「人格主義的敬虔観」「真理としての人格」

賀川は切っても切れない関係として、キリストの「贖罪愛の論理」と、その表現としての「連帯責任意識の実践」を強調します。しかし、この敬虔観、宇宙観と倫理観をともにする推進母体は、ほかでもない、長い進化の歴史がつくりだした人間の「人格」にほかなりません。The Person is the center. Personは「個人」ではない。Person「人格」は関係的なもの、社会的なものです。集団でも個人でもない。「日本は集団的社会、米国は個人主義的」とよく言われてきましたが——もう疲れますね！——キリスト教の思想として「人格」はそのネックであると賀川は考えたわけです。「人格」への尊敬、尊厳が根底にあります。

さらに、1926年『暗中隻語』の「真理としての人格」という段落で、彼の人格主義の立場を明確にします。

真理は人間の為である。それは充分人間的であつて差支へない。非人間的真理と見えるものもそれが人間の所産である以上、人間性の刻印を持つて居る。真理は結局人間性を脱し得るものではない。非人間的法則を以つて、宗教の基礎にしようとして、努力した仏教が、最も人間的な如来阿弥陀を案出したことに依つても、この辺の消息が良く判る。

否、宇宙に存在する唯一の真理は、人間性そのものなのだ。即ち普通、人格と呼ばれて来て居るものは、宇宙の真理の焦点であつてそれに依つてのみ、宇宙が認識せられ、それのみに依つて、宇宙の實在が實在そのものとして直観されるのだ。それであるから、真理とは人格であると云つて少しも差支へ

ない。凡ての真理は人格に導き、そして人格は真理の終点である。否真理そのものである。¹⁴

生命芸術：宇宙を「生きる神の衣」として捉えるところ

多くの著作で賀川は、物質、自然界、あるいは宇宙全体は、「生きる神の衣である」というカーライルの「衣服の哲学 (*Sartor Restartus*)」¹⁵からの比喩を用います。このようにして、神、自然界と人間の親密関係を主張する賀川は、一見、伝統的キリスト教理解を離れた自然主義 (naturalism) かロマン主義 (romanticism) か、もしくは汎神論 (pantheism) の立場にある、と簡単に片付けられる傾向があります。

神は宇宙に超越し、宇宙に内在、宇宙を貫いている

実際に、そのような批判を受けていた賀川は、1934年の『聖霊に就ての瞑想』の「宇宙と神との関係」の段落において、自分の立場を言い表します。

或人は、こんな質問をするかもしれない。宇宙と神と一つであるか、また人間と神とは一つであるかと。汎神論はさういふ立場をとる。然し、私は汎神論者ではない。聖霊論者である。いや、聖霊の生活を嬉しく思つてゐるものの一人である。

母の胎内に宿つてゐる赤ん坊は、母と同一物であらうか。彼は、母に孕まれてゐるながら、母とは別人格である。母は、赤ん坊を超越してゐる。しかも、赤ん坊は母の内に生活してゐる。そして赤ん坊は、母から出てきた。その如く、絶対の神は、人間を超越し、しかも人間を抱擁し、人間は神によつて創り出されたものである。

神と宇宙との関係も、同じやうに考へることが出来るであらう。物質の世界は、神そのものではない。然し、神はこれに超越し、これに内在し、これを貫いて現れてゐられるのである。物質を、神の「衣裳」と考えるなら、最も適當ではないかと私は思つてゐる。¹⁶

宇宙を「神の衣裳」という比喩

「宇宙」を神の「衣裳」であるという比喩の背景には旧約聖書の詩編の104編2節があります。そこでは神が「光を衣として身を被つておられる」¹⁷と同じような比喩が記されています。

さらに、宗教改革者ジャン・カルヴァンも『キリスト教綱要』第1篇の「創造主なる神を認識することについて」の第5章で、この詩編104編2節について次のように言います。

「そこで、預言者が嘆声を発して『神は光を衣のようにまとわれる』と言つたのは最も正しい (詩篇104:2)。これはいわば『世界を創造することによってそのしるしをあらわしたもうたとき、神はこの目に見える飾りを着けて、はじめてあらわれを示しはじめたもうたのであるが、今、われわれが目をもどる方向にめぐらそうとも、そのしるしによって飾られているのがみられ

14『賀川豊彦全集』第22巻、キリスト新聞社、1964年、72頁

15 Thomas Carlyle, *Sartor Resartus* (London: Grant Richards, 1902), 161.

16『賀川豊彦全集』第3巻、キリスト新聞社、1962年、345頁

17 聖書の引用は『新共同訳聖書』(日本聖書協会、1987年)による。

る』と言ったのと同じである」。¹⁸

賀川は、カルヴァン中心の伝統的な改革派神学を明治学院、神戸神学校、そしてプリンストン神学大学で勉強しました。後の20世紀のプロテスタントの弁証法神学からは物珍しいものに見えるかもしれませんが、より古い改革派神学の伝統からみると、賀川の考えは奇妙ではないと言わざるを得ません。つまり、詩編19編2節「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す」、またローマ1章20節「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」などの証言にもとづきたいわゆる「二つの書の神学」、つまり神に創られた「あらゆるもの」を通して、また聖書を通して、神を知ることができるという立場です。

土着型のキリスト教社会倫理観——東洋思想の再吟味(1)

後ほどまた触れますが、賀川の土着型のキリスト教社会倫理は、中江藤樹(1608-48)という初期徳川時代の儒者が説いていた「動的な聖人の道」の理想に感化を受けています。『東洋思想の再吟味』(1949年)において賀川は、孔子、王陽明、また王陽明の教えを日本で紹介した中江藤樹に触れて、主に王陽明の「知行合一説」「良知」または「致良知」の諸説を強調していて、興味深くあります。

近代の研究中心大学組織と賀川の「全体論」を比較すると

近代の大学において、文・理・社会と関わる学問分野は、相互に関連性のない別々の学科に分化され、人間の意識と知識にあるべき相互補完関係を失いかけている、と賀川は鋭く気づきました。この意識と知識の断片化は、人格、自然界、さらに共同体に対しても悪影響を及ぼす、と直観した賀川の総合的な試みは、今日の学際的研究に大いに示唆を与えてくれます。近代日本思想史において賀川の独自性は、彼が人間と社会の課題のみならず、常に「cosmos(宇宙)」にまで目を開いていたというホリスティック・アプローチにあるのです。先ほど引用した岸英司が「賀川豊彦こそ日本でただひとりの宇宙思想家である」と言っているとおりです。賀川は、同世代のピエール・テイヤール・ド・シャルダン(Pierre Teilhard de Chardin 1881-1955)と同様に、唯一、20世紀前半のキリスト教思想史において、宗教、哲学と進化論の立場から積極的な宇宙論を考察しようとしています。

あらゆるものを全体から見る姿勢

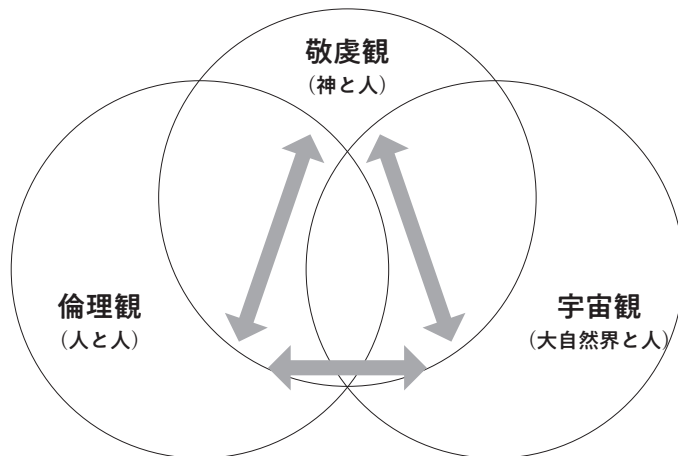
賀川は、「神と人」「大自然界と人」、そして「人と人」という視点から、次第に「あらゆるものを全体から見る姿勢」を身に着けました。私たち現代人にはこのように敬虔観、宇宙観、倫理観を共に把握する姿勢があまり見られないし、また理解できないために、そういう姿勢を肯定しないかも知れません。そのような全体的な見方は、物質の領域と精神の領域を完全に隔てている近代の思想で奪われたと言えるかもしれません。賀川は、この三関係を整

18 ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要1』渡辺信夫訳、新教出版社、1962年、64頁

理して、体系的に提示したわけではありませんが、しかし、彼の文章を読めば読むほど、この「あらゆるものを全体から見る姿勢」こそは、彼の思想の要石であったことが把握されます。

『宇宙の目的』のなかでも、この「あらゆるものを全体から見る姿勢」に触れることができます。たとえば、「自然界には、人間からみれば、拙い点、不完全な部分が数多く発見される。しかし、全体からみるとその不完全な部分が存外よくまとまっていると考えられるのである」¹⁹（下線は講演者）。賀川を理解し公平に再評価するために「あらゆるものを全体から見る姿勢」は非常に重要です。世界には複雑性（complexity）が認められますが、人間に与えられた意識という軸を通して深く考えてみると、「あらゆるもの」が互いに関わっているはずであるという結論に至っていきます。つまり、「神」なる「スピリチュアルなもの」、宇宙なる「物質的なもの」、人間なる「社会的なもの」は、その深層においてきつと関わっているはずである、という直感です。

fig.2 賀川の「あらゆるものを全体から見る姿勢」



IV 私は科学的な神秘論者である

賀川は、『暗中隻語』の「神秘の極限」において、自分についてこういう意義深い言葉を残しています。

神秘を極限して、只、感覚的にのみ、求める事に、私は反対する。私にとっては、理性も、法則も、機械の発見すらが、神秘の領域に属する。私は近世科学ほど、神秘な世界を見せて呉れたものは無いと思つて居る。科学が神秘を失つたのは、生命に絶縁したからである。科学の裏に、生命の有る事を発見するならば、機械も、法則も、理性もみんな、生命への補助者であつて、神秘の世界への、窓口であることを発見する。私は科学的な神秘論者である。私が科学的になればなるほど、私は神の世界へ深く突入する事を感じる。殊に生物

学の領域に於て私は生命の神と、直接面談する様な心持ちになる。生命と絶縁しない、認識の世界は、カントの不可知論を必ずしも必要としない。生命を通じて私は、機械の世界にすら、目的のある事を発見する。科学は神秘の神秘である。天啓の天啓である。²⁰

「科学的神秘論者 (scientific mystic)」という言葉には矛盾を感じるかもしれませんが。しかし賀川は、わざわざ「神秘論者」に「科学的」という形容詞を付け加えます。それには次のような意味があるでしょう。

科学と宗教の関係について

1922年の『生命宗教と生命芸術』で「永遠に新しき生命宗教」を述べながら、賀川は大胆に、しかも多少ナイーブなかたちで、宗教と科学の衝突の終わりを告げています。

科学は科学で宗教に対する大きな寄与を持つて居る。科学それ自身が今日では大きな奇蹟である。(中略)

科学と宗教が衝突すると考へた時代は過去の夢である。永遠に新しき生命宗教は科学によつて、芸術よりも大きな宇宙創造の大事業に参加することが出来るのである。²¹

さらに、1930年の『神に就ての瞑想』で、宗教と科学の役割分担についてこう言います。

信仰の教ふるものは、人類の運命についてであつて、科学の教ふるものは、宇宙の組立についてである。この差を考へない者は、何時も大きな矛盾に陥るのである。²²

少なくとも賀川の「科学的な」神秘主義は、前近代的、いわゆる中世型の神秘主義を評価しながらも、しかしそこでとどまらないかたちで、むしろ近代宗教と近代科学という人間の文明と人間の意識による大貢献を重視している、近代的神秘主義であると言えるでしょう。

賀川自身の修練 (瞑想と胎生)²³

1930年の『神に就ての瞑想』の序で、賀川は、科学的神秘論者としての自分の瞑想体験と理解を明らかにします。そして、賀川は、時代を離れた我々にも瞑想と祈りへの招きをしてくれます。

瞑想の森に分け入ることを覚えた私は、露のやうな滴りをその森から受取るやうになつた。真夜中に、白昼に、曙に、黄昏に、私は何処にも瞑想の扉が開かれてゐることを知つた。電車の中、汽車の中、待合室、獄房、路上、到る処で、私は瞑想の休息所を与へられ、そこで沁々と、私の胸に宿り給ふ、

20『賀川豊彦全集』第22巻、26頁

21『賀川豊彦全集』第4巻、キリスト新聞社、1964年、59-60頁

22『賀川豊彦全集』第3巻、5頁

23「胎生」(たいせい、英語: viviparity)とは、動物において、雌親が体内で卵を孵化させ、子は親から栄養を供給されて成長した後、体外に出るような繁殖形態のことである。

大能の神に就て静思することが出来る。アツシシのフランシスは白日の太陽を仰いで、瞑想し祈をしたと伝えられ、ソクラテスは弟子達と歩いてゐて、突然数分間路上に佇立して瞑想をしたと、弟子プラトーが伝えてゐる。阿含経を見ると、釈迦もまた同じ習慣があつたらしい。イエスは、四十日四十夜、荒野に退いて瞑想し、ある時はまたガリラヤの山地に徹宵して、祈と瞑想に送られた。瞑想の泉を汲むものには、神が我々の胸に密接して住み給ふことを経験する。けたましく忙しい機械文明の今日に住んでゐて、猶、太古の静寂を発見したいものは、瞑想の領域に辿り着くより仕方がない。私は、視力を失つて後、この聖域に接することが出来て、新しい泉を発見したやうに喜んでゐる。

無為のときも、無策の日にも、瞑想は先方から私を訪問してくれて、神殿のとばりを高くあげてくれる。私は、芝居の舞台裏に、颱風の夜に、忙しい熱鬧の巷に、瞑想を通して神を讃美する。神は、私の安息所であり、私の蓄電池であり、瞑想の前に、死も青醒めて消え去り、苦痛も、その威力を麻痺させる。無学な私にも、大能の神は、瞑想の裡に安んじて憩ふべきことを教へて下さる。

私は、神経衰弱に疲れた現代人が、見る前に、読む前に、歌ふ前に、戦ふ前に、まづ本然の瞑想に帰らんことを要求する。胎児は母胎の十ヶ月に、読むことなく、走ることなく、瞑目して安居する。瞑想の工夫は神の懐に倚る胎生である。私は静かに神の脈博を瞑想のうちに感じ、神の血に肥らされ、瞑目のうちに、光の世界へ踊り出づる日を待つ。私は呼吸することなくして、生き、動き、且在り得る。ああ、不可思議な胎生よ、地球は大きな母胎であり、また乳房である。私は人類の凡てが、もう一度この大きな母胎に復帰し、神の血脈に、自分を繋がんことを祈つて止まない。

一九三〇・五・二九 武蔵野の森の一隅にて²⁴

この文章中にある「瞑想の工夫は神の懐に倚る胎生である」と「地球は大きな母胎であり、また乳房である」という言い方は、きわめて興味深い。つまり、賀川が言う宗教体験は、身体的な側面をもっていて、またその神認識が「母子」の最も親しい密接な身体関係として描写されるのです。

イエスの自然観への憧れ

1935年の英語版の「賀川カレンダー」²⁵で、賀川は自分がどうしてキリスト教に入信したかを、イエスの言葉を引用して書いています。「野の花のことを考えて見るがよい。紡ぎもせず、織りもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」(ルカによる福音書12章27節)。この言葉は、若い賀川にとって圧倒的な、目が開かれるような意義をもち、「神の愛はこの宇宙全体を巻き込んでいるという緊要な発見をした」と言っています。どちらかというとなら神学的議論ではなくて、むしろイエスの自然界に対する温かい慰めの言葉を通してキリストを信じたわけですから。彼の生物界に対する興味とつながった大事な宗教的洞察のひとつです。

24『賀川豊彦全集』第3巻、3頁

25「賀川カレンダー」は、賀川のさまざまな社会事業を援助するため、米国諸教会で毎年売られた。

少年青年期において、生きる価値を脅かすトラウマを 乗り越えようとする *homo religiosus* の工夫を求める

少年青年期にはさまざまな内的次元において、賀川の生きる価値が脅かされていたと思われます。賀川は、*homo religiosus* として、いろいろと積極的な精神的工夫を求めつつ、直面していたトラウマを乗り越えようとしています。ラテン語の *homo religiosus* は、「宗教的人間」と訳していいと思います。*homo religiosus* についてジェームズ・ローダーは、心理学者のエリック・エリクソンの意味合いで、「ジェネリック宗教性が人生全体にとって決定的要素になる場合」と言っています。²⁶

賀川は、4歳のときに両親を二人とも失い、少年期を「愛なき家庭」で育ち、13歳のときに結核の診断をされ、また兄のせいで賀川家が破産、15歳でキリスト教の洗礼、18歳で「世界平和論」執筆、19歳のとき、結核が深刻になります。

結核が回復した21歳の1910（明治42）年は、賀川にとって禍々しい年なのです。1月の日記で、自殺思考を言い表し、7月になると「無の哲学」を書きます。多少長い引用ですが、この文章は、生きる意味を求めようとする *homo religiosus* である青年賀川の哀歌の生の声と気持ちをはっきり言い表しています。

私は、人類の快樂にも美にも飽いた。苦痛にも勿論あいた。従つて生存にも飽いた。唯、鉄線を延長した様な生存に飽いた。私は恋愛で、此苦痛の一瞬を取返さうとして居る。然し、恋などで、勿論私の疑惑が取れる筈はあるまい。私は今恐しい疑惑に這入つてゐる。昔は三位一体論や、贖罪で困つた。一昨年は、靈魂は社会の運命的進化の上に、何の関係があるかと云ふので苦しんだし、昨年は社会はどうでも善い、個人の靈魂は死後に連続するかと云ふので、苦しんだ。そして結論は、現在の価値あれば十分だと云ふのですましたが、今年、現在は果して、価値あるかと云ふことになつた。

ア・現在は果して価値あるか？（中略）我等の生存は、神の行為だらうか？人間の肉的行为の結果であらうか？

私は私にさへ価値の精神があれば、世界は墓の様でも、生きてゐると云ふたが、生きてゐる価値は実際あるであらうか？ こんな価値の無い生活は、果して神の恩寵による生活であらうか？ こんな生活なら、私は亡ぼして頂く方が善い。私はコロロホルムにかかつた時の嬉しさが忘れられぬ。死ぬ積りで生きて居ればなどと昔は云ふたが、今は生きて居られぬ程苦が多い。神様が、お造りになつたと思へば、「いや〜」の生存だし、仏だと云へば、「面倒臭い」と思ふし、生存の価値は根本から疑はれた。ア・生存の価値は根本から疑はれた。人間は何故生存するであらうか？ ア・唯、解決は之だ……死だ……死、死、死……。 （中略）神様は全智全能であらつしやるのに、よくまあこんな無価値の世界に住めることだ。神様は無価値でも生きてゐらつしやる。

神様は自殺なさる事がないのであらうか？ 神様も奮闘してゐらつしやる。

26 James E. Loder, *The Logic of the Spirit: Human Development in Theological Perspective* (San Francisco: Jossey-Bass, 1989), 231.

ア>私も神様の様に奮闘しよう。

ア>神様も苦しんでゐらつしやる。神様、神様……。

明治四十二年七月—神戸神学校時代の一文。「セルパン」(第一書房刊)に掲載。²⁷

27『賀川豊彦全集』第24巻、キリスト新聞社、1964年、368-369頁

28 雨宮栄一『青春の賀川豊彦』新教出版社、2003年、293頁

いわば、ゲーテの名作『若きウェルテルの悩み』(1774年)のような文体で、しかし21歳の賀川はこれほど自分の考え、感じていることを公に文章で暴露します。賀川は、真剣に自分の悩みを小説化して、そのときまでの人生を振り返っており、生きることも、キリスト教も、社会奉仕も、世界平和も含めて、すべての意味を問うのです。

と同時に、この「無の哲学」で賀川は、新たな意味合いにおいて、キリストの受肉と十字架による苦しむ神の自己犠牲的な「贖罪愛」を発見しました。虚無の直中において賀川は、「聖なるもの」を体験したと思われま

す。同じ年の12月に、突然賀川は、日本の近代史に忘れがたい、静かな、しかも画期的な行動をします。神学校の寮から新川という当時最も悲惨なスラム街に自分の身を投じるわけです。この劇的な出来事に対する解釈はまちまちです。たとえば賀川は結核を患い、もう死にたかったのではないかという意見もあります。しかし次の雨宮栄一氏の説明は、より合理的ではないかと思えます。「これは賀川の『死線を越えて』における賀川の心理描写をそのまま鵜のみにして記しているところにその原因がある。実際は賀川が新川に入る頃、病状は安定しており、それほど危機的ではなかったのではないだろうか。新川へ入る年の夏、三河の津貝村の応援伝道に出かけていることから分かる。賀川が新川に入る契機としたものは、どうせ死ぬならというデスペレートなものであったとは思えない。もっと肯定的積極的な理由があったはずだ」²⁸。とにかく、暗くて狭い部屋で、誰にも注目されない貧しい人たちの間に身を引き込むのです。これは、とても大きな飛躍ではないかと思

四つの領域に体験された危機感

今までの話を整理すれば、若いうちに賀川は四つの領域で危機感を体験していたと言えると思えます。まず「自己 (Self)」の領域で、両親の喪失、自分の病気、家の破産など苦い経験を通して自分自身の存在理由と生きる価値が問われます。

次に賀川は自分が生きている「世界 (World)」に対しても危機を感じます。当時の日本は、開発途上の近代国家として産業化・軍備化していましたが、賀川は、近代社会的問題に非常に敏感になり、そしてより広くは、帝国主義と植民地主義の台頭を懸念しました。例えば日露戦争のとき、「自分の母国が危ない方向に動き始めている」と早めに警戒を促します。

それから、先ほどの「無の哲学」が言うように、存在を脅迫する、ブラックホールのような、自分を飲み込むような不条理「虚無 (Void)」の領域でも深く悩みます。と同時に、賀川はどうしても「神聖 (Holy)」の領域からも逃がられない *homo religiosus* であって、神と一体となりたい。理屈を越えたところで確かな魂の慰めを求めるのです。

失われた「顔」の経験と賀川の心の形成

言うまでもなく、小さな子どもにとって、母、あるいは保護者 (caregiver) の存在は非常に大事です。6 カ月頃に乳児は、母や保護者が部屋から出ていくことに初めて気づきます。これは、「顔を喪失する体験」と言います。母か保護者は、子どもに「宇宙的秩序を与え、愛する他者として自己を確認する存在である (cosmic ordering, self-confirming presence of a loving other)」とジェームズ・ローダは言っています²⁹。

1922 (大正 11) 年に創刊した雑誌『雲の柱』の巻頭言「神に溶け行く心」の一部を引用します。

全てを振り捨てて、神に帰つて行け、私の魂よ、全ての底の底に、神はひとりおまへを待つ。神は最後の決勝点である。最後の母である。苦しみを越えて帰つてゆけ、彼はお園 (茜屋) よりも貞淑な愛と、変らざる慈悲を持つて、おまへを待つてゐる。³⁰

生母、菅生かめを失った賀川は、イエス・キリストに現れた神に「最後の母」を再発見しました。この「最後の母」という表現は、日本のキリスト教史において、特に大正期のプロテスタントのキリスト教において考えられないほどに珍しい表現であると言わざるを得ません。

直観的「生命体験」にもとづいた宗教的美学

スラム街滞在中、1922 年に出版された『生命宗教と生命芸術』で、賀川は、自分の直観的生命体験にもとづいた宗教的美学論を言い表します。これは、はっきりと人格主義、またはベルクソンの「生氣論 (vitalism)」の影響も受けています。

生命としての神

私の敬虔感覚は私にこんなに教へる

—「私」は「生」きて居ることを「信」ずる。

—「私」の「生」きて居るのは私の「力」だけでは無い。

—「私」以上の「生命」の「力」は私の神である。私は之を拝む。

これは理屈でもなんでもない、私は信ぜざるを得ないのである。(中略)

そしてさらに、生命そのものが宇宙の表現であると云ふことを見るのが宗教である。(中略)

私の芸術は科学が直に芸術になり得るような観照的心境を指して居るのである。それは生命芸術である。³¹

この「生命宗教」と「生命芸術」は、徐々に賀川が言う「科学的神秘主義」に進化します。やはり賀川は、きわめて早い段階で自分の見方を少なくとも自分のなかでは定めていました。つまり、キリストの「贖罪愛」と「連帯責任」を中心にして、日本の諸伝統、人格主義、さらにベルクソンの生氣論を

29 Loder, *The Logic of the Spirit*, 90.

30 『雲の柱』創刊号、1922 年、1 頁

31 『賀川豊彦全集』第 4 巻、50-61 頁

融合したのです。

賀川は、1924年の『愛の科学』で、出現していた人格的生気論的な宗教、思想と科学を統合する宇宙論を仄めかします。「進化の法則は善の所在地としての『我』のみに発見せられ、『我』は進化の法則と連絡を取つて、始めてその宇宙との連絡が理解出来るのである」。³²

先に触れた『東洋思想の再吟味』（1949年）の序は、日本の伝道者である賀川のアジアの諸伝統への関心の証しです。

私は道徳心理学を精神分析の立場より、三十数年間に至つて研究して来た。そしてその間に読み散らした書物の多くの中から、ノートして来たもの、又話して来たものをこゝに綴つて私の同志達に読んで貰はうと思つてこの書を編輯した。³³

賀川は、もちろんキリスト教の牧師、伝道者ですから一所懸命『聖書』を日々読んでいましたが、しかし中国、インド、日本の諸宗教、哲学思想をキリスト教と比較しながら、その諸伝統に対して非常に積極的な関心と敬意をもっています。いわば、弁証学的 (apologetic) な試みです。日本のプロテスタント教会と神学に目立つ特徴のひとつに、特に弁証法 (dialectical) 神学の導入から、「日本の伝統的宗教や思想とどうかかわるか」はとても面倒臭いので避けた方がすっきりするという傾向があります。しかし、賀川はそうではない。何故かというと、エリートの教養人階層のみでなく、大衆を伝道する賀川は、日本人の「心の文化」を避けるわけにはいかないと考えたからなのです。

東洋思想の再吟味 (2)

彼の東洋思想理解の根拠のひとつは、当然日本で受容した儒学の伝統です。王陽明の知行合一説を高く評価する理由のひとつは、当時の日本の宗教を批判するためではないかと思われます。賀川は、よく口先だけの宗教の傾向を非難します。知っていることと行っていることは一つであるはずだと賀川は固く信じるのです。キリスト教的範疇で言うと、言葉 (word) と行動 (act) は、表裏一体であるはずだということです。キリストの贖罪愛を信じる人は、隣人にも贖罪愛を実行します。つまり信仰 (faith) と倫理 (ethics) が密接に関わっているはずだという立場です。長い間スラム街で生活した賀川の「知行合一説」の主張には人格的な説得力と権威がありました。が、神学論としては、ことに20世紀のプロテスタント弁証法神学のキリスト論によって、このような「知行合一説」の立場がとてもナイーブなものと思われるようになりました。

もうひとつ賀川が陽明と藤樹からピックアップした概念は、「良知」またそれに関連した「致良知」です。「良知」とは、凡人から賢者まで、すべての人が預かっている先天的な「知」であって、「致良知」というのは、その「良

32『賀川豊彦全集』第7巻、キリスト新聞社、1963年、209頁。

33『賀川豊彦全集』第13巻、84頁。

知」を最大限に発揮することになります。つまり、儒教の古典『大学』が記すように、「良知」を「知」「意」「心」「身」「家」「国」「天下」、つまり宇宙の隅々にまで拡張していくことが大人（哲人）の最大の道であると言われます。Compared to “conscience,” 「良知」 is more intuitive or affective than cognitive. この「良知」と「致良知」の関係は、「源流」と「川」の関係のようで、賀川が主張する「贖罪愛」と「連帯責任」の関係によく似ています。

日本では王陽明の教えが、徳川幕府が支持した朱子学派の「先知後行説」の一種のアンチテーゼとして紹介されます。朱子学派によると、哲人はまず古典に示される「知」を身につけてから初めて正しく「行」われるというのです。そのいわゆる「論」から「実践」へという順に対して、陽明は、「知」が「行」の先にあるのではなく、誰にでも「良知」が普遍的に与えられている故に、「知」と「行」は切っても切れない相互関係にあると主張します。これは、キリスト教伝道者また社会改造者である賀川の「贖罪愛」と「連帯責任」、つまり知（信仰）と行（実践）の統合にぴったり調和します。

賀川は中江藤樹の宗教思想を取り上げながら、東京大学宗教学の初代教授である姉崎正治の『日本宗教史』を引用して、「中江藤樹がキリスト教の感化を受けたことが書かれている」と注目します。厳密に言うと、「藤樹がしばらく四国（伊予）に住んでいたが、そこで凍傷のための薬が与えられたキリシタンとの接触があったと言われている」³⁴。その姉崎の主張の根拠を証明するキリシタン時代の文章は探しても見つかりませんが、藤樹は鎖国時代のただ中に生きていたので、はっきりした証明がなくても、当時中国からのキリシタン文献などを知る可能性は充分あります。しかし大衆伝道者である賀川は、この可能性をさらに拡大します。

藤樹に於て陽明学派がキリスト教と一緒にあった。が、陽明学といつても、藤樹のそれは支那の陽明学ではなく、日本のキリスト教的陽明学であつた。それが熊沢蕃山となり、大塩平八郎となり、西郷隆盛となり、吉田松陰となつたのである。

中江藤樹はかやうに非常に大きな感化を残した人で、日本に於ける動的な聖人の道の開拓者である。³⁵

賀川のみならず、内村鑑三³⁶もそうですが、日本のキリシタン時代にキリスト教の感化を受けた藤樹のような偉い哲人がいたという主張そのものが大切です。つまり、日本にも一神教の思想伝統があると言いたいのです。元名古屋大学の山下龍二は「中江藤樹の宗教的思想と実学思想との関係」という論文のなかで、直接藤樹のキリスト教の「感化」には触れていませんが、藤樹の陽明学派的な明確な「一神教的」傾向に触れています。³⁷

面白いことに賀川は、明治期において陽明学派がいわゆる反体制の人たち、たとえば西郷隆盛、新島襄などに強い影響を及ぼした、と指摘します。同じように、賀川自身は、当時の多くの日本のプロテスタント教会の指導者や神

34 Masaharu Anesaki, *Religious History of Japan: An Outline with Two Appendices on the Textual History of the Buddhist Scriptures* (Tokyo: Masaharu Anesaki, 1907), 276.

35 『賀川豊彦全集』第13巻、134頁

36 Kanzo Uchimura, “Nakae Tōju: A Village Teacher,” *Representative Men of Japan*, Tokyo: Keiseisha, 1908. (邦訳: 内村鑑三『代表的日本人』鈴木範久訳、岩波文庫、1995年、他)

37 Ryuji Yamashita, “Nakae Toju’s Religious Thought and Its Relation to ‘Jitsugaku,’” *Principles and Practicality: Essays in Neo-Confucianism & Practical Learning*, edited by W. Theodore de Bary and Irene Bloom (New York: Columbia University, 1979), 307-35.

学者と違って、欧米の最新神学の議論を翻訳し、解釈することに心を配るよりも、絶えず日本の大衆文化を念頭におきながら、自分の信仰体験と東洋思想の理解という二つの解釈のレンズを通して創造的に基督教の教えを解釈するのです。

したがって、賀川による人格主義的な宗教観は基督教、人格主義的な宇宙観は大正の生命主義、そして人格主義的な社会観は陽明学派の総合です。ものを断片的に分析する近代的姿勢と合理性に対して、複雑性と矛盾を認めつつも、絶えず「あらゆるものを全体から見る姿勢」という「科学的な神秘主義」は、遙かに日本のプロテスタント教会の枠を超えて、日本の近代思想史における、ひとつの創造的な例外であったと言えるでしょう。

19世紀の唯心論と唯物論の対立を越えようとする「人格主義」

誤解のないように申し上げますと、賀川はただ単に東洋的、あるいは日本的な基督教を展開しているのではなくて、当時の欧米の宗教哲学にも強い関心を表しています。特に、若い頃から、19世紀のヨーロッパにおける唯物論 (Materialism) と観念論 (Idealism) の対立を乗り越えようとする人格主義 (Personalism) に共感を示します。アメリカのボストン大学の神学部で教えていたボーデン・パーカー・ボウン (Borden Parker Bowne) という哲学者は、唯物論と観念論の両極端を避けながら、人格の中で一種の統合を試みました。ドイツのゲッティンゲン大学で勉強したボウンは、新カント派のロッツェ (Rudolf Hermann Lotze 1817-81) に強い影響を受けました。ロッツェは、19世紀の中頃の有名な哲学者、また医者であり、唯心論と唯物論は完全に分けられないとあって、体系的な形而上学を提唱しています。ボウンは、ロッツェの哲学を米国に紹介しました。賀川は基督教に入信して間もなく、ボウンの書物を通してこのいわゆるボストン人格主義の思想に触れたようです。1955年の、賀川の晩年の自伝『わが村を去る』を見るとこうなっているのですね。「ボウンの人格主義の宗教哲学は、明治学院の図書館のたまものであるとわたしは感謝した。十七才のころボウンの宗教哲学を読んだから、今日まで、あまり思想的に動揺せずに、人格主義の宗教哲学を中心に進んでこられたのは、若い時によい書物に出会したためだとわたしは思っている」³⁸。明治学院ですよ、このキャンパスではありませんか。

ボウンの思想は日本の学者のなかでは全然触れていませんが、博士論文を書く学生には必要な思想です。

ボウンの人格主義の宗教哲学は、次の公準 (postulates) にもとづいています。

第一に、人間の共存。我々が生きている世界は、人格的または社会的である故に、そこで全ての思惟は始まるべき。我々と隣人は疑うことのできない事実である。

38 賀川豊彦『若き日の肖像』(毎日新聞社、1955年、104-105頁)。または、雨宮栄一『青春の賀川豊彦』(新教出版社、2003年)、199-200頁。なお、雨宮は「ボウン」ではなくて「バラン」と記すが、誤記である。

第二に、全てに当てはまる、全てを拘束する理性原理がある。これは、全ての精神共同体の至上条件である。

第三に、実際また可能性として、我々は相互理解において出会い、生活の用事が行われている共同経験の世界がある。³⁹

ボウンは、メソジスト教会に所属する哲学者で、一方、彼の「啓示論」は、明確なキリストの中心性を表現します。あることを知ろうとするために、自然界、あるいは歴史や心理学に問わなければならないが、しかし神はどういうものであるか、また人間にとってなにを意味するか、を知るために、特にイエス・キリストに完成されたキリスト教の啓示に來なければなりません。そこでだけ我々は、天の父が十分に啓示されていることを発見する。と同時に、ボウンは、新約聖書のなかで人間として帰せられている神のみ子の「受肉論」や「贖罪愛」、つまりキリストにおける「神の内在性」に焦点を合わせます。

「自然界の無神性と神界の無自然性 (The undivineness of the natural and the unnaturalness of the divine)」というのは、宗教に関する大衆的な思想の偉大なる異端である。この理神論的かつ機械論的な哲学に基づいた誤りは、次第に宗教的また非宗教的な思想を脅かす誤解の大部分をつくり出してしまう。この過ちを追い出して、より優れた道を示すことが、この小さな書の目的である。⁴⁰

賀川は、儒教のような他の伝統を尊重しましたが、1939年の「神と贖罪愛への感激」でキリスト中心的な告知をしています。「キリストの贖罪愛にこそ、全能者の最後の言葉が発せられたのだ。それは究極に於て『神は愛だ』と我々に物語つてをられるのだ」⁴¹。このキリスト中心的な「神の内在性」を強調するボウンの「ポストン人格主義」の立場は、賀川自身の宗教的直感にアピールしました。極端に神と世界／宇宙を区別する主張に反して、ボウンと賀川は、イエス・キリストの媒介を通して、神はすでに、また決定的に、我々が生きている宇宙においても現れておられるという点を強調しています。

賀川は、こうしたボウンの人格主義の影響をアメリカの自由主義神学と共有しています。ゲイリー・ドリンは『アメリカの自由主義神学の形成』で、「アメリカでの最も首尾一貫した自由主義神学の伝統は、唯一一人の思想家、つまり Borden Parker Bowne の人格主義に啓発されている」⁴²と指摘しています。ドリンは、ボウンの貢献とヨーロッパ大陸の自由主義神学の哲学的な背景を比較します。

信頼できる宗教的な主張は、外的権威に基づいていけないということを同意して、自由神学の創始者たちは、神学の根拠として、倫理的確信、宗教的経験、また形而上学的理性、それぞれを論じてきた。カント学派は、実践的理性における道徳的関心に宗教が所属すべきだと論じて、シュライエルマッハと

39 Borden Parker Bowne, *Personalism* (Boston: Houghton, Nifflin, 1908), 24.

40 Borden Parker Bowne, *The Immanence of God* (Boston: Houghton Mifflin, 1905), Preface.

41 『賀川豊彦全集』第3巻、350頁

42 Gary J. Dorrien, *The Making of American Liberal Theology: Imaging Progressive Religion 1805-1900* (Louisville/London: Westminster John Knox Press, 2001), 286.

その弟子たちは、宗教の源が認知以前の宗教的経験か直観（直感）にあると主張し、またヘーゲル学派は、ヘーゲルの絶対精神という形而上学の哲学より神学を発展してきた。100年以上自由神学は、カント的か、シュライエルマッフ的か、ヘーゲル的か、あるいは、ドイツの媒介的神学 *mediating theology* のように同時にシュライエルマッフ的とヘーゲル的、あるいは、リッチェル学派のように、カント、シュライエルマッフと近代の歴史主義の混合であった。19世紀の大半を通じて、ほとんどのアメリカの自由主義神学は、シュライエルマッフに言及するかにかかわらず、経験か敬虔にアピールをした。社会福音の時代において、多くの進歩的なアメリカ人は、形而上学的理性を除いて、リッチェル的な選択肢をしたか、あるいはシカゴ学派のように、リッチェル的な神学を通してそれを超えた。ボストン大学の人格主義的観念論は、それらに総合的に代わるものであった。それは、道徳的直観と宗教的経験と社会福音と形而上学的理性を肯定した。ヘーゲルは、またカント、シュライエルマッフ、リッチェルと社会福音主張者たちは、みな半分は正しかった。⁴³

やはり、賀川の総合的考え方は、普通認識されてきた以上にこのアメリカの自由主義神学の伝統に影響されていると言わざるを得ません。

ボウン—ブライトマン—賀川・キング牧師

もう一つ大変興味深いことに、ボウンの弟子にその後任として同じボストン大学の神学部で哲学を教えていたブライトマン (Edgar Sheffield Brightman 1884-1953) がいます。ブライトマンの最も有名な学生には、公民権運動の第一の指導者でノーベル平和賞を受賞したマーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr. 1929-68) がいます。キング牧師は、ブライトマンから伝えられたボウンの人格主義は自分の「基本的哲学的スタンス」であり、「この人格主義は、今日まで私の基本的な思想であり続けた。有限また無限の領域においても、人格そのもののみが実在であるという人格主義より二つの確信、つまりすべての人の人格への威厳と価値の形而上学的な根拠を与えられた」⁴⁴と述懐しています。私はこれを発見したときに驚きました。というのは、賀川豊彦とマーティン・ルーサー・キング・ジュニアは、同じ「ボストンの人格主義」思想に影響されつつも、賀川の場合は自分の少年青年期の経験、日本の諸伝統と現代社会問題、キング牧師の場合は米国奴隷制の歴史、黒人の諸伝統と現代社会の人種差別問題と関わりながら、二人とも人格主義の道を歩み続けて、日米両国の社会に計り知れない貢献をしました。

21世紀に、キリスト教世界がつくり出した人のなかで、キング牧師と賀川豊彦は人格主義において接点がある。このことを日本ではもう少し勉強する必要があります。そして、この人格主義のポイントで、協同組合論と労働論がやはり重なるのです。

43 Dorrien, *The Making of American Liberal Theology*, 286–87.

44 Martin Luther King Jr., STF, 100., quote from Warren E. Steinkraus, “Martin Luther King’s Personalism and Non-Violence,” *Journal of the History of Ideas*, vol. 34, no. 1 (Jan.-Mar., 1973), 98.

V 終わりに

本当に残念ながら時間になりましたが、最後に、人格主義の立場と対照的な20世紀のキリスト教神学について一言言わなければなりません。当然、近代的な神学論は、近代哲学が提供する諸課題を避けられません。たとえば、「本体 (noumenon)」と「現象 (phenomenon)」の間の溝という近代哲学の認識論的な限界のなかで、神はどのように人間に語りかけてくださっているかという難問を論ずると、厳密になにを言えるかは簡単ではありません。これは、キリスト教の死活問題であるいわゆる「啓示論」の問題になります。20世紀のプロテスタント神学のなかで、大きな存在の一人であるスイスのカール・バルトは、近代的認識論を突破するかたちで、神の自己啓示は、神のみ言であるイエス・キリスト（厳密にいうと、キリストご自身、キリストを証言する聖書、キリストを告知する教会）に厳しく限定します。特に、近代哲学的な悩みに直面していた20世紀のヨーロッパ文化圏において、バルトの「神のみ言の神学」は高く評価すべきだと思われています。

しかし、バルト以降、神と自然界、あるいは自然界と人との関係はどうかという課題が残っています。伝統的な改革神学の啓示論において、神は自然を通して人間に語りかけているという確信 (confidence) を失いつつ、バルトの立場とは異なりますが、人格主義はもうひとつの近代哲学を突破する道を開拓します。この人格主義は、自然界のなかでの人間の現実性、またその大事な役割を強調します。自然主義 (naturalism) と実証主義 (positivism) という極端な傾向を否定しながらも、人格主義は、信じることの意志的 (volitional)、また実践的 (practical) な側面を含む超越論的経験主義 (transcendental empiricism)⁴⁵ を主張します。自然界を単に物質的にとらえる立場に反対して、人間には魂、意思、直観、良心などがあるが故に、高い威厳と価値があるという立場です。ボウンの人格主義は、米国の自由主義神学の思想的根拠のひとつです。バルトの論敵であったシュライエルマッハの流れと多少異なる米国型の自由主義神学の立場は、賀川とキング牧師二人の社会的運動に大きな力を与えたことを認めなければなりません。

1932年から1934年の間に日本の教会ではバルトの神学が議論されてきました。1934年の『聖霊に就ての瞑想』の第7章「真理としての聖霊」の「聖霊と三位一体論の出所」という段落で賀川は、日本の教会におけるバルト神学の受容についてこう言います。

聖霊の体験がなければキリスト信者ではない。ところが現代の教会は、神といふことをやかましくいふわりに、聖霊をぬかしてしまふ。

例えば最近神学上に大きな問題を起した或神学の如き、絶対の神は説くが、内在の神を軽視する傾向がある。ところがパウロはキリスト教になることを聖霊を受けること、同一義に考へてゐる。聖霊を受けるといふこと、キリスト教を信ずることが同一義であることを教へた。⁴⁶

45 パロウは、この用語でボウンが意図したことを以下のように解説している。

Transcendental empiricism has primarily to do with Bowne's theory of knowledge or how persons come to know. Different from the traditional sense empiricism of Bowne's day, transcendental empiricism is the view that the categories of thought (e.g., being, space, time, notion, purpose, etc.) find their explanation in active, intelligent mind. That is, thought or mind is the explanation of the categories. The categories do not explain thought or intelligence, but are, rather, explained by it. Bowne said that, "Instead of testing our fundamental experience by the categories, we must rather find the meaning of the categories in experience. This experience, however, is not the passive experience of sense, but the active self-experience of intelligence... Living, active intelligence is the source of all truth and is its own and only standard." This is Bowne's transcendental empiricism, the point of which is that all thought about reality must be rooted in experience, that is, the active self-experience of mind or intelligence.

Rufus Burrow, *Personalism: A Critical Introduction* (St. Louis: Chalice, 1999), 28.

46 『賀川豊彦全集』第22巻、326頁

後にバルト自身も人格的、実存的な側面に触れています。結局、賀川豊彦が1960年に亡くなってすぐに、ドイツ神学に夢中であった日本のプロテスタント教会に忘れられたのは理解できないわけではないのです。その神学的な見方からすると、賀川の科学的神秘論、または芸術の話聞いても、なかなかわからないという反応が多いですね。隅谷先生の『宇宙の目的』への評価は、間接的にはバルトの神学からのものです。バルト自体はよいのですが、日本のバルトの受容の仕方には大きな問題があります。

賀川は少年・青年期の深い傷、トラウマと挫折をキリストの贖罪愛によって乗り越え、伝道者として日本の大衆のこころを一生懸命捉えようとし、近代社会の諸問題と正面から取り組み、そして宗教思想家として、最新の近代科学を解釈しようとしながら、生前なかなか理解されなかったにもかかわらず、神、自然界あるいは宇宙と社会を統合する全体論的な道を開拓しようとした。

賀川の「人格主義的敬虔観」「生命主義的宇宙観」「日本の土着型のキリスト教倫理観」を総合する三角的福音理解は、確かに日本のキリスト教史における極めて珍しい独自のものです。しかし20世紀の日本の社会のさまざまな領域において、大きな貢献を遺したキリスト教の大衆伝道者、社会改造者、科学的神秘論者と芸術家であった賀川豊彦を忘れることはできないし、忘れてはいけないと思います。賀川を「忘れることはできないし、忘れてはいけない」というのは、実は隅谷先生の言葉です。まったく先生の言うそのとおりなのです。

最後に『宇宙の目的』から賀川の言葉を引用します。

全意識的に発達して、全人類が、世界平和に協力し、戦争に使用するエネルギーを世界協同体の組織運動に回し、余剰勢力を発明発見に回すことができるならば、人類の幸福これにすぐるものはないと私は思う。⁴⁷

賀川についてのより冷静・公平な再評価に少しでもお役に立てば幸いです。ご静聴、ありがとうございました。

発題① 加賀豊彦の復権—民主的で平和な世界のために 金井新二

48 ルカによる福音書 10章 25-37 節
参照。

賀川のディレッタンティズムの復権

私は、前半は「賀川のディレッタンティズムの復権」、後半は「『生命宗教』論の復権」という二つのテーマについてお話しいたします。

まず「賀川のディレッタンティズム」です。一時期よく言われたことですが、例えば、賀川は科学の問題では素人なのに、なぜあのような詳細な科学論、宇宙論を論ずるのか、という批判が根強くあります。ディレッタンティズムの意味は「素人談義」ということですが、素人なのに専門的なことに嘴を挿む、そういう批判です。賀川さんはもちろんそうした批判は承知のうえでしていると思うのですが、そういう批判的な見方というのは一般の人びとだけでなく、賀川研究者のあいだでもある程度あったし、現在でもあると思います。しかし私はこのディレッタンティズムというものは、ある意味、なければいけないものであるし、賀川さんのようなディレッタンティズムはやはり得難い価値があると言いたいのです。賀川の社会経済論も宇宙論もディレッタンティズムの典型であると言われてきましたが、それは、れっきとした専門家や制度化されたその集団には見えなくなっているものや、出来なくなっていることがあることを思い出させてくれたと思います。これは、ディレッタント（素人）と専門家の対比です。専門家はたくさんいるわけですが、専門家しかそのことを論じてはいけないということは別にありません。いわゆる素人が論ずるということも場合によっては大切なことではないかと思います。この例えがふさわしいか分からないのですが、「群盲象をなでる」という言葉があります。専門家は小さな範囲をくまなく調べて報告する。この場合「群盲」と言っているのは「専門家」のことなのです。しかしそれが百人集まっても一頭の象の全体には考えも及ばない。このようなことがあるのではなからうか、ということです。

専門家の方々に対しては非常に失礼な例えになってしまい、専門家も社会のなかで必然的に大切な役割を担っているのです、少し意味合いを変えて受け取っていただかなければならないのですが、専門家は非常に確実な知識をもっていて報告するのだけれども、一人のアマチュアの見方に及ばないということがあるのではないかと。だとすると、賀川の社会論も宇宙論も、専門家がその専門性ゆえに見ようとしないうもの、耳をふさいでいることを、一個の人間として勇敢に指摘しているのではあるまいか、こういう見方ができるかもしれないということです。

専門家の方たちは「そんなことはない」と言うと思いますが、実はそれが、賀川という人の「専門性」だったのかもしれないと思え、賀川はそういう意味での専門家であったという見方もできるかもしれません。つまり、神の専門性、もしくは「善きサマリア人」⁴⁸の専門性です。これはちょっと奇妙な



金井新二

言葉・表現ですが、彼は、神の立場から、またイエスの教えた「善きサマリア人」の実践者として、この社会や世界をどう変革すべきか、あるいはこの宇宙はなんのためのものかと、いつも考えていました。これが彼の専門性なのです。

そういう「専門性」というのは、いわゆる世間の制度化された知識としての専門性とは違う意味の専門性ではないか。それを世間ではディレクタントと呼び、ディレクタントは専門的なことに余計な口を挿むなと締め出しているわけです。しかし賀川さんは、自分はそういう専門家なのだと居直ればいいのであって、先ほどヘイスティングス先生も言われていたように、賀川でしか見えない世界という非常に豊かなものがあるならば、それは立派なことなのです。

そういうことで、賀川さんのいわゆるディレクタントイズムと今まで言われてきた議論、見方を、もう一度見直すべきではないかというのが私の趣旨です。

「生命宗教」論の復権

2番目は生命宗教についてです。私はこの「生命宗教」を、ぜひとも多くのクリスチャンたちに学んでいただきたいと思います。自分の神とはこの身体の中に宿っている生命のことだと賀川は言います。これは創造の信仰です。しかもそれをイエスからのものと明言しています。つまりこの信仰の復権とは、イエスの復権なのです。無論、それはパウロ的救済論に対するイエスの創造論の復権です。現在まで、長い間、とくにプロテスタンティズム以降、キリスト教はパウロ的救済論へと大きく傾いて現在に至るわけですが、その間、どれだけの戦争が行われて来たか。また現在どのような暗雲が世界を覆っていることか。これがすべてパウロ的救済論のせいだとは言いませんが、関係は十分にあると私は考えているのです。救済論は元来善悪二元論に立っており、善と悪、救われた者と救われない者をどうしても区別せざるをえない、それが救済論ですね。悪と戦うとか、あなたが救われなければならないとか、そういうふうにした場合、救われた者と救われない者という区別をどうしてもつけざるをえないのが救済論なのです。したがって、本当には戦争を悪と断定できない。救済論というものは善悪二元論ですから常に戦争を支持することになります。戦争は自分は善、相手は悪と断定するときに始まるものなのです。ゆえに救済論は絶対的に戦争を肯定するものであり、戦争を否定することは出来ないのです。

それができるのは創造論、万物万人を例外なく神の創造による存在とみる創造の信仰なのです。この点についてはいろいろな議論があると思いますが、創造論というのは存在の肯定、無条件的な肯定です。創造論には敵も味方もありません。善と悪はないわけです。ですから、戦争を悪と断定できるとすればそれは創造論だけだ、ということなのです。つまり、創造の否定、存在の否定。それこそが真の悪ということなのです。そうであれば、キリスト教はあ

らためて内なるバランスを回復して、イエスの教えた天の父への子どものような信頼を取り戻すほかないのです。これが忘れられているわけですが、それを回復すれば、あらゆる戦争と殺戮に心から反対して立ち上がる、力強く平和を推進するキリスト教になることができるのではないだろうかと思うのです。

賀川さんの言葉を少し読んでみましょう。これは創造の神学と言えると思います。戦争と殺戮が止まらないなかで、現在の世界はこれを待望している、というふうに思います。

「神は何処にあるか？」と私に尋ねてくれるな。神は探す可きものでは無い。神は生く可きものだ。神は私の生命の中に生き給ふのだ。神を尋ねて会は無かつたと云ふ人がある。神を宇宙の外側に尋ねて発見出来るのであれば神は生きて居らないのだ。神が生きて居るのなら、私の表に生きて居られねばならぬのだ。神は探す前に、尋ねる前に、私の生命の中に、示現して居られるのだ。⁴⁹

これは賀川さんの『生命宗教と生命芸術』という書物の一節です。次も同じ著作からの引用です。

私は先づ「生命」といふことから出発する。それは「力」である。それは私に内在する。その癖「私」それ自身では無い。私はどうしても、「生命」それ自身を私が支配して居るとはよう考へ無い。寧ろ、「生命」が私を支配して居るように感じるのである。そこに私は生命の神に跪拝するのである。それで私は「生命」の神の外何の神をも信じて居るのでは無い。それは私に取つては実在の实在であり、価値の価値である。⁵⁰

この「生命」を自分は神としている、神は「生命」である、これはイエスから来ている。そして次のように言います。

イエスが私達に教へられた宗教は（中略）生命と愛の飛躍の中に直観する神の経験を中心とする一つの生活であつた。だから、イエスの教は、理窟では分らない。イエスの神は哲学者の考へるやうな思想の神——絶対無限だとか云ふ六ヶしい神ではなくて、『生命』である。⁵¹

ここで、イエスの神は「生命」であるというふうに言っているわけですね。福音書のイエスの言葉から二つ引いておきます。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」。⁵²

49 「生命芸術と生命宗教」（『賀川豊彦全集』第4巻、47頁）

50 同上、51頁

51 「イエスの宗教とその真理」（『賀川豊彦全集』第1巻、キリスト新聞社、1963年、138頁）

52 ヨハネによる福音書4章13-14節

イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。⁵³

ですから、イエスは確かにそういう言葉で人々に教え、自分が与えるパン、あるいは命の水、それがあなた方を生かすだろう、と言っておられるわけです。賀川さんのさきほどの言葉でいえば、それが私の内なる神なのだ、ということになります。

さて、このような神による生命の信仰・思想こそ、キリスト教的平和思想の究極的土台です。それは、万人が神の生命を生きている神の子であること、ゆえに人間は決して殺し合ってはならないことを示しています。人間は物質的な問題から対立するが、それを戦争によって解決してはならないのです。賀川生命宗教論は、イエスに立脚しつつ、そのことを強く主張しています。こうしてわれわれは、戦争多発状態から抜け出すためには、イエスの創造論的信仰・思想を回復する必要があります。賀川生命宗教論はこのことに気づかせてくれると思うのです。

ですから、私は、賀川さんの現代への復権と言いますか、改めて注目すべきことを考えると、生命宗教論が彼の平和思想の土台であろうと思います。これがなければ本当の平和の追求というものはできない。救済論ではできないのです。創造論でない。この点は、またいろいろ議論したいと思います。私は最近思うのですが、先ほど戦争多発世界と言いましたが、人間はこれから先も戦争をやめられないでしょう。そうすると世界はいったいどうなるのか。誰を責めるわけにもいきませんが、最低限、キリスト教会はこれに声を上げてほしいのです。その声が上げられるためには、イエスのところに帰らなければいけないのです。イエスの福音に帰らなければならない。パウロの福音ではないのです。

これは神学的な論議を呼ぶ点で、イエスによる創造の信仰とパウロによる救済の信仰が縦軸と横軸のように組み合わさっているのがキリスト教だと思います。今はそのバランスが、プロテスタントの300年間で大きく失われてきた。つまりパウロ主義によってキリスト教は神学を構築し、また宣教もしてきました。しかし、それは同時に軍隊によって植民地化するという事実と裏腹であったということです。ですから、どうもパウロ主義的な救済論や、それによる世界宣教は決して世界を平和にしない。創造論が欠如しているのであれば世界を平和にすることができない。そういうふうに賀川さんは考えていたのではないかと思うわけです。

発題② 労働組合、協同組合、NPO の連携

篠田 徹

会場でお配りした資料の私のプロフィールのところを見ますと、私だけがキリスト教に関連することがまったく書いてありません。でも実は一応クリスチャンです。数年前に、長いあいだ関係がうまくいかなかった兄と関係がよくなりかかったところで、兄が突然肺ガンになり、あっという間に亡くなったのです。どうして今こういうかたちでこういうことが起こったのか、というのが非常に気になりまして、なにか大きなものに寄りかかりたくなったのです。

今日のお話の一つのポイントとして、アマチュアリズムとプロフェッショナリズム、全体と部分、あるいは直観と思考、詩と散文、といったことを皆さんがお話しなさっていますが、それらで言うと、私は全部前のほうの人間です。ですからこの商売はとてつらいのです。ものを考えなければいけないのに対して、私の場合はどちらかという直観で、こうに違いないと思うのを切々と論文にすると、「これは君がそうなりたいたいと思っているからだろう」というふうに言われたりして、ちょっと理解されないのです。

そういう人間が労働組合を勉強しているのですが、私の周りは教師一家で、労働者、あるいはサラリーマンという人がまったくいませんでした。なぜ労働組合に興味をもったのかというと、やはり私が辿ってきた人生に大きな原因があって、私がユートピア主義者だったからです。ある時から、非常に理想的な社会があると信じて、そういうものに非常に興味をもったのです。これもたいした理論的なものはなく、時代が時代だったということがあります。今から思うと自分にとっても大変悲劇としか言いようがないのですが、私が高校から大学時代にかけて中国で文化大革命というのが起きていて、それこそ理想社会に向けてまっしぐらのタテマエでやっていました。現実は大変悲惨なことがあったわけですけども、日本では一切報道されませんでしたので、それに非常に共鳴していました。しかし、にもかかわらず私の専攻は中国文学科でした。どうして文学なの？と思うのですが、行った学校に中国関係はそこしかなかったからというだけの理由です。そういう意味ではやはり労働運動とか労働組合についても、頭から入っているというよりは、直観で入っています。

最初に労働組合の勉強をし始めたときに、その世界では非常に名の知られた先輩から「頭で考えるな。感じたまま行け」ということを言われました。実際にはこう言われたのではなくて、「労働組合というのは、合（愛）を取ったらただの組だ」と言われたのです。これは詩ですから、説明すると面白くないのでこれ以上言いませんが、私は労働組合は愛だと思いました。今も思っています。それにはいろいろな理由がありますが、基本は「この人と一緒にいたい」「この人となにかをしたい」「この人と助け合いたい」、その気持ちがなければ労働組合は成り立たないと今でも思っているのです。ですからそ



篠田 徹

の先輩からは、「研究するときには話を聞きに行け。その代わり話を聞いたから一切解釈するな。聞いたままその記録を残せ」と言われました。今でも確かにそうだなと思います。

そういう研究を続けてきた私にとって、賀川豊彦が生きていたら、今、なにに顔をしかめ、なにに微笑んだのだろうか？と考えるときがあります。

アソシエーションリスト 賀川

私は今の政権について、それなりに評価をし、あるいはそうではないところもありますが、ただ、直観的に「これはいかんだろう」と思ったのが、例の農協改革です。農協改革については、経済のこと、市場のこと、農業のことです。いろいろ言われていますが、私は直感的に、あの問題は「結社の自由に対する介入」だと思います。しかし、それ以上に賀川がいたら顔をしかめたらうなと思ったのは、あるとき農協以外の結社が誰も大きな声を上げなかったことです。労働組合も、協同組合も、生協も。上げたかもしれないけれども、それほど大きな声は聞こえなかった。だけど、労働組合の人なんか聞くと、「次はうちかもね」と言っている人はいます。

私の立場は、労働組合というよりはアソシエーションリズム、アソシエーションが重要だと考えています。アソシエーションを日本語にすることは難しく、「結社」と訳したり「団体」と訳したりしますが、要は先ほどお話しした、「この人と一緒にいたい」「この人となにかがしたい」と思ってグループや集団をつくる。教会などもそうですよね。学校だってそうです。今日の会場の明治学院や私のいる早稲田も含めて、ほとんど創立者が最初は結社をつくっています。自分はこのことをしたい。言いたい。それをもっと広めるために学校をつくる。これが今も残っている学校のだいたいのパターンです。そういう結社というものを大事にする。それがアソシエーションリズムです。アングロサクソンの国ではこれが大変重要視されるのですが、私は、賀川は基本的にはアソシエーションリストであると思います。自分たちでこれは大切だと思うものを、自分たちで考え、自分たちで一番いい方法を見つけて、いろいろなところでやりなさいと言い、「私はそのための種を播きましょう」と行動した人だったと思うのです。

よくご存知のように、賀川は日本の社会運動のありとあらゆるものに手を付けています。直接手を付けなくても、賀川に触発されたり、賀川から大きな影響を受けてつくられたものがたくさんあります。今日会場でいただいた賀川豊彦献身100周年記念事業 記念実行委員会構成員の所属団体を見てください。ここには農協、労働組合、生協、宗教団体が入っています。2012年は国連の国際協同組合年でしたが、そのとき非常に感動的だったのは、中小企業の協同組合が参加したことでした。実は今日の私の話の根幹に入るところですが、このように「組合」という字が最後に付いているグループが一緒になったのは、戦後は殆どないです。戦後の最初のうちはあったのです。ところが1950年代に入るとバラバラになってしまいました。それで自分たち

の仲間だとだんだん思わなくなってきました。これは、ひとつは政治の問題があって、中小企業はとくに自民党の支持、労働組合は社会党や民社党の支持という具合に政党によって分かれてしまったということもありますが、もうひとつは自分たちがプロになったということですね。労働組合のプロ、生協のプロ、農協のプロと。ただ、ほとんどこれは賀川が最初につくっているのです。

興味深いのは、35 年前に大平正芳という私が非常に好きな首相が急に亡くなったあとを継いだ鈴木善幸という首相がいました。自民党最高の総務会長と言われ、あまり首相にはなりたくなかった人ではないかと思われる、非常にいい人なのですが、この人はもともと漁協の首領です。彼は岩手県の人ですけれども、漁協活動に入ったのは賀川の影響です。会ったこともないはずですが、でも賀川豊彦に影響を受けて自分は漁協活動に入ったと自伝に書いています。だから彼は 1950 年代の最初の選挙で社会党右派から出ています。賀川がいたところですね。いろいろな事情で自民党に移っているのですが、このように賀川は、本当に党派を超えたありとあらゆるところで影響を残しているわけです。

最初の私のクリスチャン話に戻りますが、私の洗礼名はパウロであります。先ほどの話の後でなかなか言いにくいのですけれども（笑）、洗礼名を付けるときに全然考えてなくて、「篠田さん、なににする？」と言われたのですよね。レストランじゃないんだからと思いましたが、その時パウロ以外の名前を知らなかったということもあるのですが、「パウロ」と即座に答えたのは、いつも私のなかに、そして私が勉強していることの根幹にあるコリント人への手紙のパウロの言葉があります。それは「もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな喜ぶ」⁵⁴という言葉です。この「肢体」というのは英語でいう Corp(Corps)です。稲垣先生の話にあった Corporatism、つまり身体というのは取り替えがどこも利かないのだ。みんながあって一つになる。だからどこか一つの部分がおかしくなれば気分が悪くなるし、どこかが調子がよくなれば、みんなの気持ちがよくなるんだと言うのです。ここが大好きでありまして、教会学校に行っていっしょの方はこちらについていろいろな話を聞かれたと思いますが、私が YMCA にいた頃に聴いたのは、こんな話です。目と鼻と口が、ある日神様のところに行って、場所を変えてくれと言った。そこで神様が場所を代えてやると、すごく困ったことになって、「わかっただろう。みんなそれぞれ違うけれども役目があるんだよ」と言って仲良くさせるようにした、というのです。19 世紀の後半カトリック教会は、この話の後半の部分をもつごく真剣に捉えて、Corporatism という政治体制を提唱しました。つまり、階級対立ではなくて、農民と労働者と経営者は手を取り合ってこの危機を乗り越えなさいという、これが Corporatism というもので、石油危機以降、1980 年代に先進国はまた同じことをして、それを政治学では Neo Corporatism と呼んでいます。

ところがこの前半の部分を労働運動の、特に急進派は強く捉えたところがあって、Injury to one is injury to all という言葉があります。一人の者が傷つけば皆が傷つく。これは要するに階級内の連帯ですね。たとえ海の向こうだろうが、肌の色が違おうが、お互い働いている者が誰かそこで傷ついていたら、それはあなたが傷ついたと同じことなんだ。だから連帯だと。

この同じ一句が、まったく逆に捉えられること自体、聖書のすごいところであると同時に、パウロが最高のオルガナイザーであることも表していると思います。パウロは、異邦人のところに入って宣教し、大変苦勞しながら、その場その場ごとに対応をしながら教会を形成していきましたが、ご承知のように、コリントも困った教会で、問題が多くなかなか皆が仲良くなれない。だから、大丈夫かなと心配して手紙を何度も送り、場所場所に応じながら、みんなで仲良くしなさいと伝えていたのです。これがある意味でアソシエーションリズムの基本であり、賀川も、絶対に労働組合でなければいけない、協同組合でなければいけないというよりも、その時その時に応じて、アソシエーションをどうつくったらいいかを考えたのだと思います。そういう意味で、パウロと賀川はよく似ていると思うのです。

ちなみに賀川が労働組合をつくろうと思ったのは、プリンストンへ留学して、日本に帰ろうと思っていたら、たまたまニューヨークの目抜き通りを、当時、非常に元気だった繊維関係の女性の労働者の組合が大行進していたのですね。それに遭遇して「これだ！」と。直観です。本当に直観的に「これだ！」と思って、「これを日本でやるんだ」といって帰ってきて、直後の1919年に大きな争議になった川崎製鉄の争議を指導したのです。このときも賀川は実におもしろいことをするのですが、その辺はまた時間があればということで、今日お話をしたかったのは、次のようなことです。

賀川の「コラボ」という本籍

現代世界、そして日本では近年、増えつつある社会の複雑な課題を、いろいろな人達が力を合わせて解決するにはどうしたらいいか、ということに関心が集まっています。ステーク・ホルダー、当事者主権、「新しい公共」「六次産業」、地域創生、就労支援、地域包括ケア等々、この間日本の政治経済、社会文化のあり様に関わるキーワードは、多かれ少なかれこうした関心を表現しています。それはまた近年様々な事件が垣間見せる、いわゆる「無縁社会」状況に対する人々の不安と、「絆」という言葉に象徴された、東日本大震災以降いっそう顕著になる、社会連帯への希求をも表しています。

仮にこの、多様な担い手が力を合わせて社会の問題を解決する力を「コラボ力」⁵⁵と名づけ、こうした力が求められる現代を「コラボの時代」と呼んでみましょう。このコラボの時代に、全国津々浦々に存在し、メンバーはあわせて数千万人にのぼる労働組合、協同組合、NPOには、大きな期待がかかります。またそれぞれの運動や活動には、これまで以上にコラボ力が求められています。ただ労働組合、協同組合、NPO 同士の連携には、まだ躊躇が

あるようにも見えます。なぜこれらが一緒に力を合わせるのかについて、まだ「なぜ」「あえて」「わざわざ」「だれから始めるのか」という感覚がお互いのなかにあるようです。

けれども賀川豊彦のことを思い出せば、それらの躊躇が不思議に思えます。先ほどもお話したように、賀川はこれらを含め、日本の社会運動のほとんどすべての誕生に関わってきました。実際賀川が『友愛の政治経済学』の中で構想した協同組合国家には、労働組合、協同組合、NPO の連携が含まれています。けれどもコラボの時代に思い出すべき賀川とは、「福音のために、わたしはどんな事でもする」⁵⁶ と言ったパウロの贖罪愛を継いだ賀川ではないでしょうか。つまり互いに助け合い、力を合わせるのは人間の務めであると考え、その教えをより多くの人に伝えるため、「すべての人に対しては、すべての人のようになった」⁵⁷ 賀川です。したがって賀川は、その時と場合によって、労働組合をつくり、協同組合を選び、今日で言う NPO を始めました。

この活動の「本籍」「現住所」という考え方で社会運動の歴史をふりかえるならば、社会運動内外における連携に対する現在の躊躇がおかしいことが分かってきます。そして実践において原則を創造的に応用した、賀川のようなコラボ力に満ち溢れた人がたくさんいたことがわかります。そして今、労働組合、協同組合、NPO の連携に求められているのも、こうした原点に立ち返ったコラボの心を思い出すことでしょう。賀川の元に戻れば、本籍は一緒です。現住所は、労働組合、協同組合、あるいは NPO や他のものかもしれない。けれども、賀川からすればきっと同じです。

そのことに気づいていただければ、たぶん今、賀川さんは微笑むのではないかと？ そう思うのです。

発題③ 豊彦とハルのパートナーシップ

岩田三枝子

今日は、賀川ハルについて発題の機会が与えられて感謝しております。この発題では、二つの点にとくに着目したいと思います。一つ目は、市民社会のなかでの活動における二人のパートナーシップです。豊彦とハルがともに活動していくうえで、どのようなビジョン・思想・方向性を共有していたのか、という点です。二つ目は、家庭における二人のパートナーシップです。そこでは、ハルの女性としての視点に着目したいと思います。この二点をとおして、豊彦とハルの公私における生涯にわたってのパートナーシップのあり方から、今日の私たち男女のパートナーシップがどのようなチャレンジを受けることができるのかを考えてまいりたいと願っております。



岩田三枝子

ハルの生涯

時間の都合上、ハルの生涯についての詳細な紹介は割愛させていただきますが、主要部分を紹介いたしますと、豊彦と同じ明治21（1888）年に生まれ、24歳でキリスト教に入信、25歳で豊彦と結婚した後、生涯、豊彦とともに市民社会のための活動に携わります。女性労働者の人権保護のための覚醒婦人協会という婦人運動の中心発起人になるなど、ハル独自の活動もありました。家庭においては3人の子どもたちの母親でありました。1960年の豊彦の没後も、ハルは夫の遺した事業を引き継ぎ、94歳で亡くなります。

ハルの日記や随筆・小説・講演記録など、現在入手できるハル関係の史料が収められている『賀川ハル史料集』全3巻⁵⁸が発刊されたことにより、ハルの活動や思想についても身近に触れることができるようになりました。『賀川ハル史料集』を読むまで、私はハルに対して、賀川豊彦を陰で支えた内助の功的なイメージしかもっていませんでした。しかし『史料集』をとおして、ハルが、一人のキリスト者として人々の必要に仕えていこうとする篤く力強い信仰の持ち主であると同時に、夫や子どもたち、そして日々の生活を愛して楽しむ、女性らしい感性に満ちた人であるという印象を受けました。

ただ今「夫・豊彦とともに、生涯、市民社会のための活動に取り組む」と一言で申しましたが、結婚直後からスラムに住み込んでの活動に始まり、夫の活動に合わせるために、幼い子どもたちを連れての関西、関東を往来する度重なる転居や、また国内外を飛び回り留守が多く、そうかと思えばまた体調を崩して休養が必要な夫に代わり、子育てと、夫の展開する事業を支えていくということは、相当の覚悟と決断が必要であったことと思います。

この豊彦とハルのパートナーシップを、私は初めに申し上げた二つの側面から見るのが可能だと考えています。一つは、なぜ市民社会における活動に取り組むのかという視点において、豊彦とハルがビジョンをしっかりと共有していたという点です。そして、もう一つは、ハルが豊彦の妻、子どもたち

の母親として、日本の大正・昭和という時代・文化のなかで、その時代に期待された女性としての役割を受け入れながら、同時にそこには縛られない文化に対する革新性をもっていたという点です。

市民社会におけるパートナーシップ—社会に具体化される信仰

一点目の豊彦・ハル夫妻のビジョンの共有から見ていきたいと思います。豊彦のもっていたキリスト教信仰と市民社会のための活動に対する視点は、ハルの言葉のなかで確認することができます。豊彦とハルの語るいくつかの言葉を並べて比較しつつ、二人がどのように確信とビジョンを共有していたのかを見ることで、二人が築き上げたパートナーシップの源泉を確認したいと思います。

豊彦が市民社会のための活動に取り組む際の思想的な特徴のひとつは、豊彦のもつキリスト教信仰と市民社会のための活動とが分離されていないという点にあると思います。信仰と市民社会が切り離されたことではなく、一人の信仰者としてこの社会のなかで信仰を具体化していくという姿勢です。豊彦の言葉です。

宗教といふものが、個人の救ひのみを考へて、神の意志を個人及び社会に徹底することを意味してゐると思はない者は、個性の意識だけを深めて、社会に神の意志を徹底することを打つちやらかす傾向をとる。そして、社会的に活動することを浅薄なりとして退け、愛の運動を馬鹿にさへする傾向が起る。⁵⁹

キリスト教にとって、個人の魂の救ひの問題は重要な課題です。しかし、キリスト教がただ個人の魂の救ひのみに終始しているのではよくない。社会への関心にも開かれていくべきだ、という主張であると思います。そのような視点はハルもまた共有していたものでした。

社会の最もドン底とも云ふべき細民窟に於て犠牲とか、献身とか云ふことさへ主観にはないほどの働きの出来る宗教に出遇ふた私は、実に非常な感動を受けたのであります。

それ以来私の行くべき方向は今迄とは変つて来ました。(中略)従つて人に仕へ社会に奉仕することを願ふのであります。⁶⁰

これは婦人向け雑誌『婦人之友』1922年6月号に掲載されたハルへのインタビュー記事で、彼女が34歳のときの言葉です。ここでハルは、なぜスラム活動に参加するようになったのかの経緯を説明しています。ハルは豊彦と出会って後、豊彦の活動に賛同する仲間たちである救霊団が取り組むスラム活動を知ります。キリスト教の信仰によって、スラムの人々に仕えているキリスト者たちの姿を見たハルは、「社会の最もドン底とも云ふべき細民窟に於て犠牲とか、献身とか云ふことさへ主観にはないほどの働きの出来る宗教

59「キリスト教兄弟愛と経済改造」(『賀川豊彦全集』第11巻、キリスト新聞社、1963年、189頁)

60「大きい感動」(『賀川ハル史料集』第1巻、361頁)。引用にあたり旧字体の漢字を常用漢字に改めた。



新川スラムの子どもたちを自然体験に連れて行った豊彦とハル(写真中央)

に出遇ふた私は、実に非常な感動を受けた」と言います。そしてハル自身も「人に仕へ社会に奉仕することを願ふ」と述べています。ハルはここで、宗教、つまりキリスト教の精神が人に仕へ社会に奉仕する原動力になっていることを認めています。ハルにとっても、豊彦と同様、キリスト教の信仰と市民社会のための活動とが切り離されておらず、その働きの根底に信仰があると受け止められています。

組合運動とキリスト教

豊彦は、市民社会における活動のなかでも、とくに組合運動に大きな力を注ぎました。先ほど触れましたように、市民社会のための活動を信仰の実践として捉えていた豊彦でしたが、その具体的な方法のひとつが組合運動であったと言えます。豊彦の言葉です。

個人的な救いのみでなく、社会的な救済において、イエス・キリストの救済力のリアリティーを示さねばならないことを知った。そこで私は、消費協同組合、質庫信用組合、学生信用協同組合を組織した。⁶¹

社会の内に働くイエス・キリストの救いの現実的なかたちとしての組合であると言っています。ハルもまた組合運動について語ります。

資本家も人であれば労働者も又同様人である。◇々に相互合共力して、各その持てるものを提供して、共に人類と◇しての幸福な人生を送らねばならぬと考へ来つて、最近労働者は組合を作り、一致団体して事に当、人間並の生活を送ろうと計ものである。⁶²

一人の力では解決がなくとも、協同組合を通して人々が協同で事を行うときに、大きな力が生まれることをハルは確信していました。

またハルは協同組合の必要を述べるとき、一人の主婦、一人の生活者としての目線から語ります。

茲に於て団結の必要を思ひます。中心より出ずるところの叫び、正義とそして団結の力であります。(中略)一家の主婦達一人一人、社会に改革を求めることもありませう。中心よりの訴へを心に持つ人もあるでせう。各自に種々の問題が有ることゝ思ひます。然し、一人一人では極めてその力の薄弱であることを感じない訳には行きませぬ。⁶³

これはハルの婦人運動である覚醒婦人協会活動時期の言葉ですが、ここからは一致団結して相互に協力することにより正義と団結の力が生まれるのだという、一家の主婦の一人としてのハルの確信が読み取れます。ハルは市民社会における愛の行いとして、協同組合を挙げ、それは小さな一人ひとりが団

61 賀川豊彦『友愛の政治経済学』野尻武敏監修／加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会出版部、2009年、27-28頁

62 「労働婦人と保健問題」1919-23年頃（『賀川ハル史料集』第1巻、437頁）。◇は判読不能カ所。

63 「消費者の団結と婦人」1921年頃（『賀川ハル史料集』第1巻、436頁）

結して助け合うことであるとしました。キリスト教の愛の実践としての協同組合があるという理解において、豊彦とハルの視点は一致しています。

家庭におけるパートナーシップ

二人は一致したビジョンをもち、市民社会における活動を展開しますが、家庭においてはどのようなかたちのパートナーシップを築いていたのでしょうか。

私は初めに、『賀川ハル史料集』を読むまではハルに対してたんに豊彦の内助の功としてのイメージしかもっていなかったと申し上げました。それ自体はある意味で正しいとも言えます。ハルの言葉には女性であるハル自身はまず妻であり母であるという認識が見えてきます。

1914年のインタビューでハルは「自分はただ夫を台所で迎えるに過ぎない無力な者であります」と自らを説明しています。実際には当時すでに夫・豊彦とともにスラムで活動に取り組み、けっして「ただ夫を台所で迎えるに過ぎない無力な者」ではなかったはずです。当時のハルの日記には、病む人びとのお世話をし、路傍伝道に出掛け、スラムの人々のなかで活動する日々が記されていますが、それにもかかわらずハルは自身の役割の場を台所とし、自らを「無力な者」と表現しています。このような女性の役割を台所と結びつける傾向は1914年の日記の他の箇所でも見られます。

いくら勉強し様と思つても、女はやはり台所もあるし洗濯もあるので、実際に机に向ふのは少ないけれど、自分が心を着け様で実物に当るので、反つて勉強になるかも知れぬ。⁶⁴

また次のハルの記述では、女性の役割を出産に還元する様子が見られます。

男子の労働に対する、婦人は産なるものが、それに依つて神を知ることが出来る。⁶⁵

これらの言及においては、女性の役割が、家事、出産、育児を担う者であり、男性は労働する者という認識が見られます。また、妻として夫の選択に従順に従うようにと説きます。

妻たる者よ。主に従ふごとく己の夫に従へ、夫は妻の為たればなり、と聖書にある如く、よく夫に従ふ、撰択に於て間違なく一たん夫と定めれば従順でなければならぬ。⁶⁶

このような部分を読みますと、ハルがその時代が求めていた良妻賢母親をそのまま受け入れているようにも見えます。しかしこれはただ無批判に夫に従う、夫のコピー人間になるという意味の言葉だとは思いません。なぜならハ

64 日記 1914年3月7日 (『賀川ハル史料集』第1巻、150-151頁)

65 日記 1914年4月7日 (『賀川ハル史料集』第1巻、158頁)

66 「開花幼稚園における講演」1928年3月8日手稿 (『賀川ハル史料集』第2巻、92頁)



松沢の自宅（森の家）の庭先で

ルの生き方がそのような意味ではないことを示しているからです。ハルは信仰にもとづく市民社会のための活動のビジョンを夫・豊彦と共有し、そのビジョンの実現に向けて主体的に活動しました。

今日は詳細には触れませんが、ハルは女性労働者の人権保護のための覚醒婦人協会という婦人運動を展開するなど、一人の独立した社会活動家としても十分に評価し得る女性だと考えます。妻としての役割を語る箇所ではハルが意図していることについてはさらに注意深くハルの言葉を考察する必要がありますけれども、少なくとも豊彦とハルの歩みからは、その時代が求める、よき妻、よき母の枠組みの中に生きている文化的制約と同時に、決して夫に対する妻の無批判な服従ではなく、妻であるハル自身もまた主体的に、かつ積極的に夫婦共同でビジョンを遂行していく革新的なパートナーシップが見られると考えます。

豊彦の女性理解もまた興味深いものがあります。豊彦の言葉です。

婦人は人間としてばかりでなくて、男と違って特別な特権を持つて居るのである。それは女は子供を育てると云ふ権利を持つて居る。育てると云ふことは生むことをも意味する。(中略)夫がその日の餌をさがす間、婦人は家に在つて、子供を育て、父母に、夫に仕へる使命を持つて居る。⁶⁷

このような女性の母性に対する大きな期待の一方で、豊彦のユニークな点は、母性が大切だから女性は母性の領域である家庭にのみ止まるべきであるという結論には帰着しなかった点にあります。むしろ豊彦は、女性の人格を積極的に認め、女性の教育の機会、参政権、職業をもつことに対しても肯定的です。豊彦の言葉です。

婦人の使命には多々ある。人間としての自覚もせねばならないし、女になる前に人間にならなければならない。であるから結婚する前に相当教育も受けなければならないし、それと共に職業に対する理解もなければならない。人間としての社会的婦人の責任も感じ、婦人として権利も主張せねばならぬ。⁶⁸

日本の女子は人格者として教育を受くる権利がある。単に女学校があるばかりでなく、女子が理学士にもなれば文学士にもなるといふやうに、男子と同じ教育の機関を与へられなければならない。⁶⁹

また他の箇所では、女性の代議士や県会議員の可能性にも言及するなど、豊彦の女性に対する認識は先の時代を見据えた先見性と評価してよいのではないのでしょうか。豊彦は、女性には子どもを生み育てる母性や、愛に代表される母として、妻としての領域があると確信している一方、政治や教育の領域において女性の権利が阻まれてはならないとし、市民社会における男女の協働を理想としています。

67 「女性讃美と母性崇拜」(『賀川豊彦全集』第7巻、342頁)

68 同上、342頁

69 同上、319頁

今日における男女のパートナーシップに向けて

豊彦とハルは公私にわたり生涯強く結ばれたパートナーでした。そこに二つの側面を見てきました。一つ目は、市民社会において、信仰にもとづく愛の実践が必要であると信じた豊彦とハルとの確信の共有がパートナーシップの根底にあったということ。二つ目は、豊彦・ハル夫妻の文化に対する革新性です。ハルが妻として、母としての役割を遂行したその姿勢は、その時代と文化の制約のなかで生きる姿が浮かび上がってきます。ハルはその時代が求める妻像・母像を受け入れています。同時にその枠組みに縛られず、夫との信仰に根差したビジョンの一致により、互いの特質を尊重しあい、補い合い、活かしながら、ビジョンを遂行していく革新性をもっていました。

このような二人のパートナーシップを「協働のスピリチュアリティ」と呼びたいと思います。「協働」とは、二人が異なる人間として、男性と女性として、違いをもちつつなお互いを尊重し、市民社会における活動の場で、また家庭の場でともに働いた姿勢です。スピリチュアリティとは、二人の市民社会における公共的活動の源泉にある信仰の確信があったということです。1 + 1 が2になるだけでなく、2以上の豊かな実りをもたらすことを、豊彦とハルのパートナーシップが示しているように思います。

現代の日本社会では男性と女性がともに社会的活動に参加していくことを目指す「男女共同参画」という言葉や、また男女ともに公私の生活のバランスを考えるワーク・ライフ・バランスという言葉などが頻繁に聞かれ、取り組みが進められている一方で、現実には多くの面で実現の困難さが立ちまわっています。豊彦とハルの生きた時代は、男女共同参画の言葉も、ワーク・ライフ・バランスの言葉もありませんでしたが、二人の公私におけるパートナーシップのあり方は、今日の私たちの男女のパートナーシップのあり方にひとつのチャレンジを与えてくれているように思います。



晩年のハル（自宅にて）

ディスカッション

トーマス・ジョン・ヘイスティングス×金井新二× 篠田徹×岩田三枝子×会場参加者+稲垣久和

稲垣——ここからはディスカッション形式で進めますが、最初に登壇者の方々の発題について補足とやり取りをしていただき、さらにフロアの皆さんにオープンにして討論を深めていきたいと思います。

ヘイスティングス先生、そして金井先生、篠田先生、岩田先生から、豊彦・ハルのかなり広範な領域についてお話いただきましたが、今日のキーワードのひとつが「違い」であったように思います。今しがた岩田先生から、男女の違いがありつつも互いにパートナーシップで協力していくスピリットについてお話を伺いました。また篠田先生のお話でも、労働組合、生活協同組合、農業協同組合というように現住所が違って、各組合は違うものを扱っていますが、賀川という本籍は一つで、それぞれが今連携を保ちつつ協同していくということでした。そういうテーマが今日のシンポジウムのキーワードになっているという印象をととても深くしています。というのは、今の日本はすごくバラバラだと思うのですね。みんな違いばかりを強調して自己主張は強いのですが、どういうわけか協同作業ができない。その辺が、我々が今、豊彦・ハルの大きな仕事全体からまずは学ぶべきことではないかと思いました。

さらに、二人がもっていた内面のスピリチュアリティについても、ヘイスティングス先生、金井先生から、従来とは少し違う角度で語られたと思います。ヘイスティングス先生は職人と芸術家と言われ、金井先生はディレクター（素人）と専門家と言われたのですが、現代は、どちらかというと専門研究者、職人的学者が尊重され、日本の教育や学問の形態もそのようになっています。それに対して、私たちが再評価しなければいけないのが、賀川という人の、芸術家として直観的に全体を把握する能力、宇宙を把握するスピリチュアリティの深さではないかと思うのです。この全体的・直感的な把握は宗教には共通しているものだと思うのですが、賀川のそれは、世の中から引き籠って山で修行するといった性質のものではなく、絶えず社会に出て行って世の中に還元されていく、そういう静と動の両方を併せもったスピリチュアリティ（宗教性）で、それが今日非常に大事だということをつくづくと思わされました。

そういう宗教性がある種のUnity（統一性）を与えている。ヘイスティングス先生は「人格」とか「生命」ということが、今ものすごく重要だと言われました。また篠田先生は、肢体・身体（corps）が一つであるという聖書の言葉を言われましたが、そのcorpsが一つひとつが組み合わさって、全体として人格、生命というものが生じてきているわけです。しかし、どうも私たちの近現代文明の特徴は、その全体や身体を部分部分に分け、それこそ頭と心臓と肺と足というふうにバラバラに解体して、一つひとつは極めて緻密に深く研究されているのですが、全体としての生命性というものはみられ



ていない。そこでは、一つの Corps (身体) との類比、人格が失われてしまう。キリスト教でも「キリストのからだなる教会」という言い方をしますが、有機的に全体としてコミュニティのなかで機能しなければいけないのに、それがバラバラになっている、ということとも繋がってきます。私はコーディネーターとしてお聴きしていて、そういう印象を感じました。

ここで、それぞれのお互いの講演・発題を聴いて付け加えたいという点があれば、付け加えていただきたいと思います。ではヘイスティングス先生からお願いいたします。

ヘイスティングス——自分の言いたかったことを補っておきたいと思います。今、稲垣先生がおっしゃった、いわゆるスピリチュアルな側面です。賀川は、どういう一日を過ごしていたのか。そして彼はどのような祈りの仕方をしたか、それからキリスト教用語では仏教のように修行とは言わずに「修練(spiritual practice)」と言いますが、賀川が、どのようにして神との接点というか関係をつくり、それによって新たにされていたかということです。実はこれはすごく大切なポイントの一つなのではないかと思います。先ほど『神に就ての瞑想』の序(15-16頁)を引用しましたが、ここでは賀川は自分なりの瞑想論を説明してくれています。今の稲垣先生のご発言と関連があると思います。

引用の最後に「私は、神経衰弱に疲れた現代人が、見る前に、読む前に、歌ふ前に、戦ふ前に、まづ本然の瞑想に帰らんことを要求する」とあるように、賀川は現代人に声を掛けているのです。祈りと瞑想をぜひ実践してほしいと。これは日本のプロテスタンティズムのみならず、近代のプロテスタンティズムに共通の課題の一つですが、祈りと瞑想が、教会で教えられているのでしょうか？ 家庭では、もうほとんどの場合教えられていないと思うのです。どこでそういう修練を学び、身につけられるか。どうすれば祈りと瞑想ができるのかということです。

そして、このなかで「瞑想の工夫は神の懐に倚る胎生である」「地球は大きな母胎であり、また乳房である」と言っています。これはきわめて興味深い言い方です。つまり、賀川が言っている宗教的修練は身体的側面をもっているのです。賀川は、時間をかけて静かになって——「静座」と言うのですが——座禅のようなことをしています。これは今日、プロテスタント教会のなかでとても求められています。キリスト教は観念的な宗教ではないはずで、賀川は、その身体的な宗教体験をもう一度彼の時代に、また今の私たちの時代に回復することを訴えています。彼の場合は神認識が、最も親しい身体関係として母子の関係だと言うのですが、身体性を失った今の私たちには、どうもピンと来ないのではないのでしょうか。

この身体性は、稲垣先生が、どのようにしてともに市民社会に協力できるかと言われたことと関係してきます。やはり教会の役割は、子どもたち、青年たちにも、祈り・瞑想の仕方を教える、実際に行動する、ともにすることを教えることです。その時、言葉だけでは足りない。話す前に、動く前に、胎

内にいる子どものように、とくにこのような情報の波に覆われている現代の社会において、ともに静かになる集団は教会にほかならないのではないのでしょうか。歴史的にみても、そうしたところから新しい運動が生まれてくる可能性があるのです。キリスト教の宗教性をもう一度考える必要があることを、賀川から教えられていると思います。

金井——ヘイスティングス先生がおっしゃることを聴いていまして、まさにこれは賀川さんの世界だとすぐ思うわけです。賀川さんというのは本当に途方もなく広い世界をもっていた。また深い考えをもっていたと思うのです。先ほどは、ちょっとふざけたような言葉で「ディレッタンティズム」と言ったのですが、賀川さんは、仏教や他の東洋、日本の宗教にも非常に造詣が深く、理解がありますよね。またキリスト教についても、私は先ほど「イエスに戻る」ということを言ったのですが、賀川さんはもちろんイエスに戻っているわけです。そしてイエスに立脚してカトリックの瞑想のような世界も実践し、プロテスタンティズム的に社会改革や、伝道活動も行い、パウロ主義的な贖罪愛も大いに語るわけです。ですから今日、いろいろな方のご発表を聴いて改めて、賀川さんというのはほんとうに広く深い人物なんだなと思っています。

篠田——お話いただいている賀川の大きさ深さというものについて、実は数年前、すごく時間をかけて研究をしなくてもそれが分かるということを教えてもらおう出来事がありました。

私のゼミは、膨大な課題を与えるということでみんな来なくなるので、非常に人気がなくごく少人数なのですが、たまたまそういう情報を聞かなかったのか、来てしまった学生がいたので、「じゃあちょっと1カ月あげるのだから、全部読まないで目次だけでもいいから、『賀川豊彦全集』に全部目を通してみて」と言ったのです。1カ月経って彼が来たので、「どうだった？」と聞いたなら、「先生、どうしてこんなすごい人を私は知らなかったんでしょう」と言ったのです。私はその瞬間「もう君は来なくていい。もうAをあげるから」と言おうかな、と思ったんですが（笑）まさにこの一言ですよ。彼は、大変だなと思いながら1カ月バーッとページを捲ったのでしょう。でもそれでそう思ったのです。しかし、1学期は残りあと2カ月もあるので困るなどと思って、「じゃあどうしてみんな賀川を忘れてしまったのか考えてみてくださいよ」と言って、もう1カ月あげました。そうしたら今度は、「大きすぎたんですよ。見えないんですよ。大きすぎて」と言ったのです。もう本当に、この時は「大学院に来る？ 試験受けなくてもいいけど」と言おうかな、と思ったんですが、これもまた見事な直観と言えます。まあ、ページを捲ってそう思ったんでしょうから、そんなに難しいことではなくて、当たり前と言えば当たり前のことなのかもしれなくて、逆に言うと我々がそう見えなくなっているのかもしれない。賀川をいろいろ称えることも大事かもしれませんが、我々自身がなぜ賀川が見えないのか、賀川が聴こえないのか、ということを考えることも大事なのかなと思います。

ただ、最近そういう賀川が見えるようになった、聴こえるようになった例を

いくつか挙げたいと思います。先ほど国際協同組合年で中小企業団体が入るという話をしました。実は日本の中小企業の9割方は業種別団体の協同組合に入っています。たとえば皆さんが中華料理屋さんに行くと組合員証が貼ってありますが、あれは全部協同組合によるものです。散髪に行けば床屋さんもみんな協同組合です。日本は非常に細かく業種別組合があつて、これをまとめているのが1948年に出来た「中小企業等協同組合法」ですが、この「総則」には、「中小規模の…事業を行う者、勤労者その他の者が相互扶助の精神に基き協同して事業を行うために…」と、最初から経営者と勤労者を並べて書いてあり、今の協同労働（ワーカーズ・コレクティブ）を考えているのです。

一説によると通産省は、最初中小企業庁をつくりたくなかったそうです。これをつくらせたのはGHQで、それは、軍国主義を招いた財閥などの力に拮抗する力をもたせるためには、労働組合をつくり、中小企業を守り、彼らの手を繋げるためだということなのです。本当にGHQが言ったかについてはいろいろな説があるのですが、しかし元は同じ精神だったということは確かです。国際協同組合年では、皆が本来元であったところに戻りつつあるのかなと思います。

そういう意味で、賀川は戦前に、セツルメントやお店を開いたりしました。セツルメントは福祉の活動と考えられていますが、私は、それらは今で言うコミュニティ・ビジネスの一環であったと思うのです。たとえば神戸で開いた食堂「一膳飯天国屋」。あれはコミュニティ・ビジネスですよ。儲けられなくて続きませんでしたけど、多少は儲けを期待したビジネスを考えただけで、あれも中小企業のひとつの考え方であろうと思います。

最後に、先ほど東洋思想との関連についての話がありました。今お話ししたような賀川的な考え方によって日本で運動が連携するときに、いつも気になっていることがあります。それはお寺です。日本には小学校の数より多くのお寺が、全国津々浦々にあります。かつてはそこがいろいろな協同のために動いていたのですが、残念ながら今はそれがなかなか見えません。そうしたスピリチュアリティという点から言うと、キリスト教の教会も仏教のお寺も、ある意味では同じところにある。賀川のスピリチュアリティについて私はあまり勉強をしていないのでよくわからないのですが、ヘイスティングス先生がおっしゃったように、賀川は東洋思想や仏教といったキリスト教以外のところにも目が行っていたし、それらからも大きな影響を受けていたことを考えると、もし連携ということを考えるなら、お寺の存在を考えてよいのではないかと思います。これは今日、ヘイスティングス先生から私への課題として教えていただいたこととして感謝して申し上げたいと思います。

どうもありがとうございます。

岩田——ヘイスティングス先生が、賀川豊彦は欧米においても尊敬されている人物であると話されたことは、私自身もとても納得できる経験がありました。今から10年以上前に、アメリカの神学校の修士課程に在籍して修士論文のテーマを考えていたとき、ある日突然、アメリカ人の知人が「ミエコ、

トヨヒコ・カガワって知ってる？」と聞いて来たのです。アメリカの片田舎で、日本に来たことがない、日本とは無関係の普通のアメリカ人の方から賀川豊彦の名前を聞きいて非常に驚きました。

私は不勉強で、それまで賀川豊彦について本当になにも知らなかったのです。私の母が生協好きでして、毎週火曜日にコープさんから品物が届いていたので、コープと関係のある人らしいというくらいの知識しかなかったのですが、その時初めて賀川豊彦について聞く機会を与えられたのです。そして彼は「自分はアメリカ人なので彼の書いたものを直接読むことはできない。でもミエコは日本人で日本語が読めるのだから、賀川の書いたものをもっと読んで、それを教えてほしい」と言うのですね。それが、私が賀川豊彦に関心をもつ最初のきっかけになりました。

それから10年くらい経って『賀川ハル史料集』が刊行されたということで、今度はハルさんのほうに関心をもったのですけれども、今日のヘイスティングス先生の講演を聴いて、改めてそのことを思い出し、賀川が世界で共有できる人物であることに改めてなにか喜びのようなものを感じました。

稲垣——ありがとうございます。ヘイスティングス先生の「祈り」と「瞑想」というところから、ひとつはやはり仏教、お寺との協同作業など、いろいろなところとパートナーシップを組んで協同作業することが、今の日本で必要だと思います。『東洋思想の再吟味』はそうしたスピリチュアリティを教えてくれる著作とも言えると思います。日本のキリスト教は人口の1%で教会の数は全国に8,000-10,000の間くらいあると言われていますが、仏教のお寺は10倍の8万あるのです。ですから、教会と同時にお寺がスピリチュアリティに開眼して賀川スピリットを実践し日本の市民社会に寄与していけば、非常に興味深い現象が日本社会に出て来るのではないかと、そんなことも思いました。

今までの賀川豊彦関連のシンポジウムなどではたぶん初めてだと思うのですが、賀川ハルさんのことが取り上げられました。賀川ハルさんは、当時の男女のパートナーシップという歴史的な段階ではありましたけれども、いわゆる内助の功というレベルではなくて、まさに一人の人格として賀川と協同作業をし、パートナーシップを発揮したということで大変教えられました。1960年に賀川が亡くなってからさらに20年ほど、賀川が始めた雲柱社その他の事業をハルさんが引き継いで、しっかりと切り盛りしていかれたと伺っています。実は今日この会場に、賀川夫妻のお孫さんの富澤康子さん(東京女子医科大学循環器外科助教)が来ておられます。お祖母さまのイメージを少しお話しただけならと思うのですが、いかがでしょうか。

富澤——母は豊彦・ハルの長女の千代子です。私は今まではまったく賀川豊彦研究の近くにいないくて、自慢ではないのですが本は一冊も読んだことがありません。中学のときに試しに読んでみようとしたのですが、難しすぎて理解できず、こんな難しいことを皆様はよく分かっていらっしゃるかと、とても尊敬いたしました。(笑) 今日聞かせていただいて、言葉さえ聞いたことがないというのは少し恥ずかしいと思いました。

私は祖母 賀川ハルと同じ家に住み、日常を見ていました。ハルは家庭婦人でしたが、雲柱社のいろいろな事業に関係していました。祖父がまだ存命で、ハルは雲柱社が運営していたどこかの保育園の卒園式で卒園証書を手渡す係もしました。ちょうど母に用事があり、ハルは私の子守を頼まれ、卒園式に連れられて行った思い出があります。そのときハルは、まだ幼稚園の入園前で3歳になっていない私を、会場の人たちに向かい合うハルの隣の席に座らせました。私は「なんで私はもらえないの?」と言いながら座っていたのを覚えています。そのように、仕事場に孫を連れて行って、どのように働いているかを見せたことは私にとってとても強い印象で残っています。

私が祖母に学んだことのひとつに「筆まめであれ」というのがあります。祖母の机の脇に、シュヴァイツァー夫妻が二人で木の下でベンチに座っている写真の葉書があり、本人から手書きで送られたものでした。シュヴァイツァーの名前は知っていましたが、何をした人かを知って、その方たちがわざわざ祖父か祖母に葉書をくださって、それが大切に長いこと机の脇にあったということに驚きました。

また、ハルから「分け隔てなく」ということを学びました。母 千代子は医学部を卒業し、結婚しても、実家である上北沢に住んでいました。父の留学中か、あるいは無給医局員の頃でうちはすごく貧しかったのですが、祖母は私と弟にお年玉をくれるときに、「はい、やっちゃん」「はい、かずちゃん」と言って私たちにくれるだけでなく、「はい、ちよちゃん」と言って母にもお年玉をわたしていました。筆まめであれとか、その時いる人全員に与える、今思えば、日常で学んだことが多かったように思います。

私は一度だけ書いた本を生協で売っていただいたことがあります。狭い領域の趣味の本で、知恵を絞って、苦しんで、助けてもらって書きました。豊彦は筆まめで、著書がたくさんあります。書く辛さはどれほどか分かりませんが、ミリオンセラーを出すことがいかに大変であるかということが分かりました。今後は、豊彦を尊敬しながら著書を読み、勉強したいと思います。今後もよろしく願いいたします。

稲垣——ありがとうございました。そのようなわけで、今に生きる賀川スピリットをいろいろな角度から検証していける大変貴重な機会になっていると思います。

さてしばらく、質疑応答にしたいと思います。

会場参加者（横山文彦氏）——大月新生教会の会員で「どんぐり牧場」の仕事をしております。私のアルバムには私が賀川先生に抱っこされた写真があります。毎日のお祈りの最後には「賀川先生の健康をお守りください」という言葉をつけていた私の家庭でした。賀川先生の農村伝道の事業のなかの、武蔵野農民福音学校の敷地の中で私は育ちました。賀川先生が亡くなるまで私の家で産ませた卵を私が上北沢の先生の自宅まで届けていたのです。今日のお話では、賀川先生のいろいろな事業があるのに農村伝道の話が出てきませんでした。また、私の事業の「どんぐり牧場」は知的障害の人たちと寝起きを共にして生活しているのですが、賀川先生の事業のなかに、いわゆる社会的

弱者の事業がない。そういった仕事に賀川先生が携わらなかったのはどうしてなのだろう、という疑問を感じております。

篠田——ご承知のように家の光協会という農協の文化団体がありますし、それから農文協という組織、そういう農業における協同の教育・文化活動というものがあるのは、皆さんご承知のとおりだと思います。家の光については賀川が大変尽力し、彼がつくったようなところもあると思いますけども、私は、それはとても大事な思い出すべきことだと思っています。

今日は触れられなかったのですが、スピリチュアリティやモラルの問題を考えるとき、ではそれを今どういうふうに、現実の社会のなかで増していくのかを考えると、広い意味での教育の必要が出てきます。アメリカ社会を理解するうえで今でも世界中で読み継がれ、アメリカ人自身もよく読んでいる本に、アレクシ・ド・トクヴィルが19世紀前半に書いた『アメリカの民主主義』(American Democracy)があります。このなかで彼は「心の習慣」ということを言っています。これは比較宗教学者のロバート・ベラーという人が他の人たちと一緒に、現代の「心の習慣」がどうなっているのかを調べた、そのものズバリのタイトルの本が出ています⁷⁰。要するに、アメリカでアソシエーションをつくるのが文化として定着しているのはなぜかと言うと、人々が日常的に支え合うことが心の習慣になっている。それが大きな世界、地球の正義、今で言えば環境問題にも繋がっている。そのとき、教会や他のアソシエーションが、その媒介、メディアになり、そのようにものを考える癖をつけさせていると言うのです。

私はこの「心の習慣」ということがとても大切なことだと思っていて、そういう意味では、協同組合や労働組合という組織をつくって運動を展開することも大事なのですが、賀川が一番大事に思ったのは、その「心の習慣」をどうやって多くの人に広めるかということだったのではないかと思います。ですから彼がつくったものには必ずそういう教育機関がありますし、農民運動では特に、彼が科学知識にも詳しくだったので、今なにをどんなふうに作ったら一番いいのかを必ず一緒に教えていて、そういう意味では非常に総合的な教育を展開しています。賀川の業績については、そうした面も非常に強調すべきかなと私は思います。そういう意味で、ご指摘を本当にありがとうございました。

稲垣——「家の光」という雑誌に賀川が連載してとてもよく読まれた『乳と蜜の流るゝ郷』という小説が単行本になっています⁷¹。本日の司会もされている杉浦先生、一言付け加えていただけますか。

杉浦秀典——賀川豊彦記念松沢資料館で副館長および学芸員をしております杉浦と申します。まず農業関係ですが、賀川の流れ以前にも産業組合の一つとして農業会というのもございましたが、賀川はそれとは別に農民組合というものを杉山元治郎と共に結成しました。それは、貧しい小作農の方たちのための組合でした。当時小作農の方たちは、地主から、小作料という土地使用料を支払って、土地を借りて農作物を作っていました。しかし不作で小作料が払えない農家の人たちは、借金をしてなんとか凌ごうとするのですが、

70 ロバート・N・ベラー、他『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』島園進・中村圭志訳、みすず書房、1991年

71 賀川豊彦『復刻版 乳と蜜の流るゝ郷』家の光協会、2009年

それがこじれると、小作争議が起こり、なかには暴力事件などが起きて、かえって地主から土地を借りられなくなるなど、ますます不利になってしまふことがありました。さらに不作で借金をして小作料を用立てると、やがて支払えなくて倒れていってしまうこともありました。こういった人たちに、先ほどあったようなアソシエーションとして農民組合を結成させて、話し合いによる地主との交渉を行って、問題を解決しようとしたのです。この農民組合は、1922（大正11）年4月に、神戸YMCAで結成されましたが、それが燎原の火のごとく全国に広がったと言われています。このように賀川は農業関係者とは早くから深い関係をもっておりました。ただ、やはりそこにもいろいろな政治的な動きがあつて、必ずしも方針が一枚岩だったわけではありませんでした。ですから、結成してから後の農民組合は、賀川、杉山の影響力が、他のイデオロギーが違ふ勢力によって後退していくことが起こつたようです。

もう一つの知的障害者の施設についてですが、石井十次の記念会へ、山室軍平と共に参加していることから、児童福祉事業についての影響を受けていたことは知られていますから、児童養護施設への関心はある程度はもっていたと思います。しかしその当時、賀川自身が知的障害児の施設への関心がどこまであつたかは、不明です。現在の社会福祉法人雲柱社のなかには、障害児者施設がありますが、賀川たちが運営していた時代よりも、後の世代の人たちによって、創設された施設になります。賀川豊彦は、さまざまな子ども向けの福祉施設に取り組んでいますので、おそらくは障害児者のための施設運営も意識のどこかには置いていたのではないかと推測します。

稲垣——篠田先生がアソシエーションイズム⁷²について、トクヴィルやその延長上でペラーの『心の習慣』のことを紹介されましたが、アソシエーション（結社）のようなさまざまな中間集団をつくり、横の繋がりによる人びとのきずなをつくっていく。ご存じのようにこの伝統はアメリカで非常に強かつたわけですが、日本でそれを真つ先にものすごい勢いで推進したのは賀川思想だと思ひます。その意味で、日本におけるアソシエーション、今でいえばNPOや協同組合といった中間集団が非常に重要になる面が賀川スピリットにはあることをもう一度確認したいと思ひました。

会場参加者（竹内よう子氏）——生協やキリスト教会に関わつてゐる竹内と申します。たまたま母が、私が6歳のときから生協活動に関わりまして、賀川先生のお考えに大変共鳴して教えを受け、最終的には日本生協連盟の副会長までさせていただきました。私自身も結婚してからも生協の活動にずっと関わつて50年以上になります。私はたまたまキリスト教の中学校、大学を出させてもらひ、日本キリスト教団の三軒茶屋教会でも60年くらいお世話になってきたのですが、ずっと私の心の中にわだかまりとして残つてゐることがあります。今日先生方から賀川先生がアソシエーション的、キリスト教的、さらには東洋思想にまで及んだお考えをもつて生涯お仕事をされたことを伺ひました。それなのに、生協で働いてゐる人やその組合員には、生協を安全な商品を手ごろな値段で得るところくらいにしか考えられていないこと

72 Associationism: 結社主義。共通の関心で自発的に結びつく集団をアソシエーション（結社）と呼び、地縁にもとづく旧来の共同体（コミュニティ）の対となる概念。アソシエーションイズムはそれを重視する立場、主義。19世紀初頭、ロバート・オーウェン、サンシモンなどの初期社会主義、協同組合の思想を信奉する者たちがその信条を表すために用いた。

が多いように思います。生協全体でもそれは問題だということで、人の教育に力を入れようとは言っていますがなかなか浸透していかないところがあります。では教会では、と思うと、今の教会で賀川先生の話はほとんど出てこないですし、知られていないように思います。

そこでなにができるのか考えても、私自身不勉強でなかなかできることが分からずにおりますが、賀川先生の思いとはまったく逆に、今皆が自分のところの活動だけでバラバラになっている。これは絶対に間違っているということを、今日のお話を伺っていて本当に実感しました。これからどうしたらいいのか、私の小さな力では考えられませんので、その辺の見通しを伺わせていただきたいと思います。

稲垣——ありがとうございます。篠田先生が「本籍」と「現住所」という非常におもしろい表現をなさいましたが、もともと組合も協同組合も農協も、また教会も、賀川まで戻ると本籍として一つであった。それが現住所として分かれてしまっているが、今もう一度「本籍」で一つになるということ私たちには課題として与えられたと思います。

いわゆるプロとアマチュアという表現も出てきましたが、大事なキーワードです。賀川の関わった事業も、プロ化と言いますか、それぞれが専門性を高めることで分かれていったわけです。それがもう一度アマチュアに戻る。アマチュアというよりも、賀川に見られるような、広い意味での「宇宙の目的」「宇宙の心」まで還ることが語られました。これはもう宗教性、人間の根源にあるスピリチュアリティの問題です。そこまで目覚めないと、私たちは賀川を断片的には継承できるでしょうが、包括的、ホーリスティックに継承することは難しい。そのことも確認できたのではないかという気がいたします。

ヘイスティングス——日本の社会では、宗教者が社会には出ないのですね。お寺が僧侶の、教会が牧師・神父の領域だと考えて、社会には出ないという問題があります。檀家制度がありますが、檀家が寺でなにか儀式をすることが中心になっていて、個人としては社会に出て行く聖職者もいると思いますが、組織的には日本の教会・寺院は社会に出ていかない。日本の社会が求めているのは宗教者の出番です。教会、神社、お寺から離れて社会に行くことではないかと思います。

今、上智大学、東北大学、龍谷大、他、カトリック、国立、仏教などの大学が連携してスピリチュアルケアを行う人材の養成を考えています。そうしたプロジェクトによって日本の社会に教職者の出番があるかもしれません⁷³。しかし現状は、全く閉じ籠っていると思います。

稲垣——宗教の出番というのは非常に重要な問題です。宗教は宗教でまた引き籠っている状況があるのですが、やはりそれが社会に還元されていくことが必要な時代でもあると思います。アソシエーション、結社、NPOに関わるテーマですが、非営利組織の研究をされている島田^{ひま}恒さんが会場にいらっしゃいますので、なにか付け加えていただくとありがたいと思います。

島田——専門は経営学です。コープこうべさんの地域に住んでおりますが、コープも現実的にはすごく世俗化しています。要するに賀川さんが当初考え

73 震災後、東北大学の実践宗教学寄附講座 (<http://www2.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/2017/index.html>) が拠点となって“被災地や医療機関、福祉施設などの‘公共空間’で心のケアを提供する”「臨床宗教師」の養成が始められ、2018年からは一般社団法人日本臨床宗教師会 (<http://sicj.or.jp/>) による臨床宗教師の認定が行われている。

られていた、ひとつの特徴というものが段々なくなって、イオンやセブンイレブンといった市場と競合することが中心になっていて、元の理念は非常に衰えているなという感じはいたします。

労働組合は経営者側に対して非常に力が弱くなっていますし、協同組合も発展性がなくなって、むしろ世俗のほうが勝ってきている。他方でNPOもまだまだ育てていかなければいけない状況です。そういうなかでコラボをしていく場合、どういうコラボを現実的な力をもってしていくかは非常に大きな課題だろうと思います。

篠田先生は、本籍は一緒に現住所が別になっていると言われましたが、やはり本籍をしっかりと出して、協同組合であれば、他の市場原理で営業しているスーパー等とは違うのだということをもっとはっきり社会一般の方が認識していくような力強さをもっていかないと、賀川さんの本当の精神を実現していくことはできないのではないかと感じるようです。

稲垣——「コラボの時代」というのは実に大事なキーワードになると思います。協同の必要性ですね。

今日は私たちに大きなチャレンジを突きつけられ、それぞれが課題として与えられました。それをそれぞれの現場、現住所に帰って深めていただければと思います。

登壇者の先生方、どうもありがとうございました。

あとがきに代えて— 『宇宙の目的』 で伝えたかったこと ⁷⁴

稲垣久和

戦後に世界連邦樹立のために、1960年に亡くなるまで奔走した賀川豊彦が、21世紀の世界平和、日本の平和のためになにを残していったのか、それを、最後の作品『宇宙の目的』の新しい読解として、探してみたいと思います。賀川は「宇宙悪」のひとつとして、日本の起こした悲劇的な戦争があったのではないかと語っています。

賀川の『宇宙の目的』のモチーフは大きく分けて二つあります。ひとつは自然神学というテーマです⁷⁵。自然神学というのは、伝統的には自然の世界、人間の世界、歴史の世界を通した「神存在の証明」のような意味合いをもっています。自然科学をテーマにした自然神学では「自然法則のもつ美的側面」ないしは宇宙の審美性も大きなテーマとして扱われてきました（たとえばA・マクグラス『科学と宗教』⁷⁶）。しかし『宇宙の目的』は単純な自然神学ではありません。そこには倫理的な問題、特に「悪の起源」というもうひとつのモチーフがあるからです。

人が人を殺すのは個人倫理のうえで悪の最たるものですし、また、戦争は大量の殺人を伴うゆえに社会悪の最たるものになるわけですが、戦後の賀川が日本の敗戦とともに「武装解除」を叫び⁷⁷、その後にラッセル、アインシュタインと共に世界平和の運動に挺身していった理由はどこにあったのかと考えるときに、多分、同胞三百万、外国人二千万という大量死を生み出した人類史の巨大な「悪」の経験が背後にあったに違いないと思います。広島、長崎の原爆投下で極まった「悪の頂点」、これを止めることができなかつたアジア・太平洋戦争への深い懺悔の意味があったことは想像に難くありません。実際に本書の最終部分で“原水爆による人類の破滅”という表現も登場します⁷⁸。原爆投下という出来事は、特に科学の発達という点からみて、賀川が体験してきた日本近代史の矛盾と深く絡み合っています。明治日本の“和魂洋才”によってスタートした「精神性と科学の発展」の間には大きなアンバランスとズレが生じていました。このズレが増幅して、宇宙悪としての広島・長崎の原爆投下となったのではないかと？ 原爆を投下したのはアメリカですが、それを招いたのは日本であるわけです。際立って鋭い宗教的感性をもっていた賀川はこれを、宇宙目的からの「微細な故障」⁷⁹と表現したのではないかと思います。

一方で『宇宙の目的』は、物理学、化学、生物学などのやたら細かい科学的知識を披露しながら展開していく著作なので、これに目を奪われていると他方の「倫理的」モチーフが見えなくなってしまいます。しかし“選択的な進化”の頂点に人間の自己意識が来ていることに注意すべきです。賀川は主体的な「私」という自己意識の出現を「宇宙の目的」の中心と見えています。地球上の生命は自己意識の出現によって頂点に達しています。そして、ここに人間の宇宙における責任も生じてくるのです。つまりこの人間の「責任」に

74 本稿は当日資料のあとがきとして掲載された。より詳しくは、稲垣久和「宇宙の目的再考(1)(2)」(『明治学院大学キリスト教研究所紀要』47・48号、2015・2016年)を参照。

75 稲垣久和『公共福祉とキリスト教』教文館、2012年、66頁

76 アリスター・E・マクグラス『科学と宗教 新装版』稲垣久和・倉沢正則・小林高德訳、教文館、2009年、138頁

77 稲垣久和『改憲問題とキリスト教』教文館、2014年、6頁

78 「宇宙の目的」(『賀川豊彦全集』第13巻、450・451頁)

79 同上、453頁

こそ、彼の積極的な社会改良家としての活動の意味づけがありました。社会悪を運命として諦めない。これは人間の「自由意志」による決断と責任において取り除けるのだ、社会は改良できるのだ、こういう確信があったのだと思います。

賀川は「宇宙の目的」序文に書いています。

宇宙悪の問題と取り組んだのは、私の十九才の時であった。私は原子論を研究するために京都大学の水野敏之丞博士を尋ねた。それは一九一二年ごろであった。一九一四年七月第一次世界戦争の勃発とともに、米国プリンストン大学にもおもむいて「哺乳動物の進化論」を専攻した。その後私はいそがしい日本の社会運動の暇をぬすんで「宇宙悪とその救済」を研究しつづけた。シナ事変のとき平和運動のために東京渋谷の憲兵隊の独房に拘置せられ、さらに巢鴨刑務所に移された。そのときも私は「哺乳動物の骨格の進化」の書物を獄中で読んでいた。

太平洋戦争が始まる少し前から、私は宇宙悪の問題を宇宙目的の角度より見直し、宇宙の構造に新しい芸術的興味を感じるようになった。⁸⁰

「シナ事変」(1937年)、「太平洋戦争」(1941年)とまさに日本のファシズムに引っ張られて、個人にはどうしようも止めることができない戦争という出来事が賀川に「悪」への考察を加速させたのだと思います。この序文の短い記述のなかにすらそれが出ています。近代日本の抱えたジレンマがついには大戦争への突入という悲劇的結末を招いた、その大悪が彼の脳裏にあったことが明らかです。賀川の『宇宙の目的』という本がたんなる「神存在の証明」というだけではなく、「宇宙悪の解決」「悪の起源」といった大きな倫理的テーマと絡み合わされて書かれている理由はここにあると解釈します。それにしてもなぜ、近代日本にこのような悲劇的結末が起こったのか、を考えますと、今、「近代日本の抱えたジレンマ」と表現しましたが、悲劇的な結末を招いたひとつの理由は、近代日本のなかにはスタートから、科学とそれを支える人文学ないしは倫理学の間の発展にジレンマまたは跛行性^{はこうせい}があったのではないかということです。科学と人文学は共に人間文化に必要なものです。アジアでは科学は発展しませんでした。人文学は栄えました。しかし西欧近代に起こった近代科学は、やがて実証主義の虜になり、機械的な無目的な単なる知的ゲームと化しました。したがって、本来、目的に生きるべき人間に、目的もない強力な実証的^{実証的}科学が発展すれば文化は危険極まりない方向に行きます。科学の無目的な異常発展が続くと、人間精神を食い尽くしてしまいます。これが余りに不調和な歪んだかたちで進展すると、最終的にはそれが増幅してやがて破局をもたらすのではないかと。日本という場所でそれが現実となり、賀川の敏感な宗教的直観はこれを感知したのではないかと考えます。最終的に彼はそれを“宇宙目的の選択の条件に起こった故障、”そのとてつもない増幅と受け止めています。

ごく常識的な歴史観ではこのように言われています。いわゆる近代日本のスタートに「和魂洋才」と言われたスローガンがありました。「洋才＝科学の受容」は東アジアのなかでもきわだってスムーズに進み、それ相当の人材も輩出しています。たとえば細菌学者・北里柴三郎のペスト菌の発見が1894年、野口英世の黄熱病の病原菌の発見が1911年。1922年にはアルベルト・アインシュタインが来日して、日本の物理学者と意見をかわし、主要都市で講演して、その合間に日本の著名な慈善事業家ということで、神戸で賀川とも会っています。湯川秀樹が中間子理論を出したのが1935年（日本人初のノーベル賞受賞は1949年）です。世界の医学界や物理学界の最先端研究が、欧米から見れば遅れているとみられた当時の東アジアで、いち早く近代化しつつある日本から出ています。

しかしキリスト教宣教という面からみると、事態はまったく異なって見えてきます。なぜなら、このような近代日本の科学発展の動き（洋才）と1859年からスタートしたキリスト教宣教はまったく結びついていないからです。キリスト教が日本の知識人そして民衆に与えたものはなんだったのか。それは「和魂」に似てはいるがそれよりやや上質な魂の救い、仏教的な「極楽浄土に行くこと」との類比で「天国に行くこと」と大差ないメッセージでした。むしろ、そう余儀なくされた、と言うべきかもしれません。西洋においてそうであったように、キリスト教は科学をも生み出した唯一神教としての強固な人生観・世界観としては受け取られませんでした。

そのなかで賀川の宗教的感性は例外的でした。彼には全体を一举に把握する唯一神教的直観力がありました。19歳の時、1907年に宇宙悪の問題に取り組み、1912年（24歳）頃には原子論の研究のために京都帝国大学の学者を訪問しています。しかもなんと彼が神戸のスラム街で救貧活動に格闘していた、まさにその時代に、原子論の研究をしていたというのです。その後のプリンストン留学は1914-16年です。賀川が米国で勉強しようとしていたのはなんだったのか。進化論の研究だと本人は言っていますが、あえて想像力をたくましくすれば、「和魂洋才」つまりこの科学と人文学の間の進展の日本的な大きなギャップの意味を見出そうとしたのではないかと考えられます。

賀川は『宇宙の目的』のなかで、湯川秀樹の『存在の理法』（1943年）からアインシュタインと湯川の説を引用しつつ次のように言っています。

もし、湯川秀樹博士の仮説を、極限をもっていけば、法則の真実性ということとはなくなるわけである。アインシュタインはこの点を非常に警戒して、物質性そのものの相対性は説いたが、法則そのものの絶対性は信じていた。客観的にいえば、アインシュタインのいうのは、ほんとうである。「自然法則というものは、要するに無限の可能性にある制限を加えるものであると考えられます。法則とは常に一種の“選択法則”であるといえるでしょう。」（『存在の理性』85ページ）

湯川秀樹博士は、宇宙法則が無現の可能性のなかよりある選択によって、因

果づけられたものであると考えている。私は、この見方が正しいと考える。⁸¹

こうして一般の物理学者たちの議論を利用しながら、選択法則という自らの自然哲学にやや強引に引き付けようとしています⁸²。さらに湯川の次の言葉を引用しています。

「したがって現在の物理にはなんというか、ちょっとわけのわからぬものがある。たとえば、量子力学における観測の問題等には何かわけのわからないものがある。簡単に割り切れないところがある。しかし、それならばこそ、生命とか、歴史とか、宗教とか、いろいろなものと通じる道が残されているのである。十九世紀的に考えれば機械論よりほかにない。自由意志などはいふ余地が全然ない。それ自身では完全なもののようにみえるが、それではいけない。」(湯川秀樹「存在の理法」156-157 ページ)⁸³

湯川は中間子論という高度に専門的な物理学のレベルで世界的な大理論を打ち出しています(電磁場の第二量子化によって光子を導出できることの類比で、核力場の第二量子化によって π 中間子を予言した)。その現代物理学者が、専門を語るというよりもあえて自らの人生観を一般向けに披露しているエッセイをそのまま賀川は利用して、なお人間の「自由意志」を論証したかったのだと思います。

ところで、湯川が高度な科学理論を展開しているその頃から、奇妙なことに日本は強い神道的ナショナリズムによる軍国主義に彩られた日本に変貌していきました。それは最終的には広島・長崎の悲劇で終わります(1945年)。日本の科学の発展に見合うかたちで日本の人文学は発展できませんでした。和魂のなかでは、近代的な西洋科学に見合った人間学を発展させることができなかつた。和魂は高度な科学発展の重みに耐えきれずに瓦解したわけです。賀川の同時代人の最も著名な人文学者で倫理学者の和辻哲郎(1889-1960)は、この「和魂」を哲学的に基礎づける役割を自ら引き受けた人物ですが、「和魂」は西洋近代を超克できるという日本学から、和辻は日本の軍国主義を正当化してしまっています(1937年)。和辻は次のように書いています。

日本は近代の世界文明のなかにあつてきわめて特殊な地位に立っている国である。二十世紀の進行中には、おそかれ早かれ、この特殊な地位にもとづいた日本の悲壮な運命が展開するであろう。あるいはすでにその展開が始まっているのであるかも知れぬ。(中略)

もし十九世紀の末に日本人が登場して来なかつたならば、古代における自由民と奴隷とのごとき関係が白人と有色人との間に設定せられたかも知れぬ。しかるに日本人は、永い間インド及びシナの文化の中で育つて来た黄色人であるにもかかわらず、わずかに半世紀の間に近代ヨーロッパの文明に追いつき、産業や軍事においてはヨーロッパの一流文明国に比して劣らざる能力を有することを示した。(中略)かかる世界史的任務を課せられた者としてののみ、

81「宇宙の目的」(『賀川豊彦全集』第13巻、331-332頁)

82 賀川は進化論の“自然選択”を目的論的視点から「目的を持った選択」と見なし、物理学、特に量子力学の“選択律”にもこのような方向で解釈する(稲垣久和「宇宙の目的・再考(1)」[『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第47号、2015年、81-108頁])。

83「宇宙の目的」(『賀川豊彦全集』第13巻、332-333頁)

日本人はその発展の権利を有し、さらにその道を阻むあらゆる者を打倒し去る権利を有する。かかる意味において文化的創造に携わる人々の任務はきわめて重い。それは小さい自己の生活の利害などをはるかに超出した世界史的な任務である。身命を賭して努力すべきはただに戦場のみではない。⁸⁴〔「文化的創造に携わる者の立場」1937年9月〕

84 和辻哲郎「面とペルソナ」(『和辻哲郎全集』第17巻、岩波書店、1963年、441-444頁)

85 「宇宙の目的」(『賀川豊彦全集』第13巻、452-453頁)

このようなことを平然と描く「和魂」の代表的哲学者と、賀川は同時代の人です。賀川の胸の内はどうだったことでしょうか。

私は、賀川は、キリスト者として内面的にも深い矛盾と葛藤を感じていたに違いないと思います。この科学と人文学(「和魂」は八紘一宇^{はっこういちう}などという途方もない“宇宙の目的”を唱えています!)の日本的な跛行性とズレ(故障)が大量の死者を生んだ邪悪な戦争の原因になります。もし発展途上国として低レベルの科学技術しかなければこのようなズレは起こりえません。当時、零戦と呼ばれた高性能戦闘機を生み出す航空技術、世界最大級の巨大な戦艦を生み出す造船技術をもっていた国です。和魂と洋才との間のとてつもないズレ。このズレはキリスト者賀川のなかに「悪の問題」として、いやそれ以上に「宇宙悪の問題」として生じたのではないのでしょうか? 賀川は『宇宙の目的』の最後に「宇宙悪とその救済」という難問を論じることになります。

悪の起源はわからないとして不明に付せられてきた。宇宙目的からみれば、悪の起源問題は明白である。それは宇宙目的に到達し得ないことから起るのである。宇宙目的は選択の組み立てによるものであるから、その選択の条件に微細な故障が起っても、悪は発生する。

微細な故障の発生することは「有限」の世界においては、避けることができない。しかし、有限の世界に組み立てが始まり、「生命」が生れ、「生命」の奥に「精神」が出生し、「精神」が無限絶対にまで接近しようとする意欲を起したことは勇壮なものであるとせねばならない。⁸⁵

きわめて暗示的な文章です。日本の和魂洋才は、“宇宙目的の選択の条件に起こった故障”を引き起こすこととなってしまったわけです。これを国家権力が利用して国民を戦争に駆りたてていきました。零戦に乗って敵の空母を攻撃するカミカゼ特攻隊は確かに「勇壮」極まりない。「和魂」も行きつくところまで行きついたという観があります。しかしその初期の微細な故障が次第に増幅しつつは多大な悪を東アジアにもたらす結果となりました。300万同胞と2,000万外国人の命を奪った日本史上の最大の悪を引き起こしたのです。これは否定しようもない事実です。この悪はいかにして贖われるのか。日本人キリスト者としての賀川は次のように書いています。

宇宙悪よりの解脱救済の道を、昔から人間は三つの角度から考えた。第一はインドの宗教の形式、すなわち、虚無思想である。第二は西欧思想として発達した有神的救済の道である。第三は近代科学思想による宇宙悪の追放であ

る。

私は、この三つの思想はたがいに対立するものではないと考える。これらは人間の意識の上に発生するものである。⁸⁶

賀川は、西欧のキリスト教の道とは異なり、東洋思想との対話によって東アジアの悲劇を克服しようとしています。それはどのようにして可能なのかというと、実は、このような方向はすでに実際に賀川によって『東洋思想の再吟味』のなかで示されています。まさに日本の悲劇のさめやらぬ敗戦2年後の1947年に書かれたものです。

天を見失った日、尚天が人間の心に窺き込んでくれて、天の方に引上げんとする神聖の秘義を示してくれる。それは決して人間の力ではない。それは勿論人間を無視するものではないが、人間を内側から高めてくれる超越の根本実在である。その実在者は至高の愛そのものである。その至高者が宇宙全体に対する責任意識をもつてくれる為に、我々の靈魂を内側から温め、我々、有限者に対して過去の悪を贖罪愛を以て修繕し、復活の希望に満してくれる歴史的表現をとる尊い意志の持主である事も信じ得る。⁸⁷

このように序文で書いた後に、「神が日本にまで拡張してくれる贖罪愛の連帯意識は、その意識内容として新しく抱擁すべき、東洋精神によつて培はれた日本の精神的遺産が如何なる遺伝因子を持つてゐるかを、見極めておく必要がある」⁸⁸と書いて、易経、論語、老荘思想、王陽明、印度宗教、法華経、ガンジー、中江藤樹について論じています。賀川には、このような日本のよき伝統を通して「世界倫理」に貢献しようという意気込みがうかがえます。これは一種の包括主義です。

仏教では法華経の章ごとの吟味をして、禅と茶道についても高く評価していて、これらが日本文化と日本人の心、特に道徳や倫理に与えた影響を述べています。

中江藤樹については儒教、特に知的な朱子学よりも実践的な陽明学の影響を受けたことから高い評価をしています。

この宇宙の神に対する孝行の主張は、藤樹の経験から出たのである。彼の著作「翁問答」は徹頭徹尾この思想を以て一貫してゐる。生活と意識のうちにこの傾向を以つて貫いた。それはまた王陽明学派の良心説と一致してゐる。藤樹は実践道徳を無視しなかつたが、神からきた良心を離れての単なる道徳は無意味だと考へた。この良心の琢磨は、宇宙の父なる神に対する心尽しと、精神生活の修養とによつてのみ達せられる。神を宇宙の父といつたところに、中江藤樹が孔子学派と違つてゐる点がある。普通の儒教学派であるなら、政治的道徳や知識に力を入れるのであるが、藤樹は政治や道徳を離れて、宇宙の神を根本にした。そこに普通の儒教と違ふ点がある。藤樹は、だから宇宙の心に意を注いだのである。⁸⁹

86 「宇宙の目的」(『賀川豊彦全集』第13巻、454頁)

87 「東洋思想の再吟味」(『賀川豊彦全集』第13巻、83頁)

88 同上

89 同上、133頁

そしてこの「宇宙の心」については、まさに8年後に書かれた賀川の最後の作品『宇宙の目的』のなかで、科学との関係で、さらに詳しく吟味されることになったわけです。それで「宇宙の目的」の最後の結びの言葉は次のようになっています。

しかし、人間の力には限度があるから、人間を生存せしめ、進化発展せしむる力を先験的に準備している宇宙の絶対意志にすべて依存するよりほかに解決の道はないと思う。

宇宙に目的ありと発見した以上、目的を付与した絶対意志に、これから後の発展を委託すべきだと思う。さればとって、なげやりにせよという意味ではない。私は、人間の意識の目ざめるままに、すべてを切り開いていく苦闘そのものに、超越的宇宙意志の加勢のあることを見いだすべきであると思う。⁹⁰

私は「すべてを切り開いていく苦闘そのもの」が賀川の生涯であったと言ってよいと思います。和魂洋才と言われた日本では、東アジアとしては、いち早く科学を導入することに成功しています。国民の科学のレベルは高かったわけですが、ただそれを支えた「和魂」の意味付けは十分ではなかったのです。そこで賀川は、日本のよき宗教的伝統のみならず高い科学的能力をも包括主義として「宇宙の目的」に入れたかったのではないかと思うのです。賀川の包括主義は日本の科学や宗教をも包括しようとしているようです。

しかしそれにしてもなお、この包括主義が、贖罪愛によってであるという点を賀川はやはり譲りませんでした。そうでないと日本史上の最大の悪は贖われないからです。贖罪愛が欠けるとズレが生じてしまいます。ただし贖罪は聖書的な宗教の根底にあるものであり、贖罪愛という言い方はやはりキリスト教の言い方になります。こればかりは日本宗教では困難であり、キリスト教にしかないのですから。多分、彼の胸のうちにあったのは、パウロのコロサイ書1章の宇宙論的キリスト論の頌栄の現代版であったのではないかと思います。彼はこのような祈りのなかで近代日本の和魂洋才の結末を生きた人生の総決算として、『宇宙の目的』を——このやや困惑に満ちた作品を、残さざるを得なかったのではないかと考えます。

出演者プロフィール (2020.12 現在)

基調講演

トマス・ジョン・ヘイスティングス (Thomas John Hastings)

Executive Director, Overseas Ministries Study Center at Princeton Theological Seminary, Editor of the International Bulletin of Mission Research. 元・日本国際基督教大学財団主任研究員、賀川豊彦記念松沢資料館研究員、国際基督教大学キリスト教と文化研究所研究員。ホイートン大学大学院修士課程、プリンストン神学校博士課程修了。Ph. D. (キリスト教教育)。1987年、米国長老教会宣教師として来日し、20年に亘り北陸学院短期大学、聖和大学、東京神学大学等で主に実践神学(キリスト教教育)を講ずる。著書に *Practical Theology and the One Body of Christ: Toward a Missional-Ecumenical Model*, Eerdmans があり、2014年3月には賀川最晩年の著作『宇宙の目的』の英訳 *Cosmic Purpose, Cascade* を上梓。また2015年春に *Seeing All Things Whole: The Scientific Mysticism and Art of Kagawa Toyohiko (1888-1960)*, Pickwick を刊行。米国宗教学会員、国際実践神学学会員。

パネリスト

金井新二 (かない・しんじ)

東京大学名誉教授。前賀川豊彦記念松沢資料館館長。早稲田大学法学研究科、東京神学大学大学院を経て、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退(助手就職のため)。東京大学文学部教授、北星学園大学学長などを歴任。専攻は宗教学、キリスト教思想史。著書に『「神の国」思想の現代的展開—社会主義的・実践的キリスト教の根本構造』『現代宗教への問い—宗教ブームからオウム真理教へ』(共に教文館)『ウェーバーの宗教理論』(東京大学出版会) ほかがある。

篠田 徹 (しのだ・とおる)

早稲田大学社会科学総合学術院教授。早稲田大学政治学研究科博士課程中退。北九州大学法学部専任講師、早稲田大学社会科学部助教授、ハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員などを経て現職。専攻は労働政治。主著に『世紀末の労働運動』(岩波書店)、共編著に『労働と福祉国家の可能性—労働運動再生の国際比較』(ミネルヴァ書房)『2025年 日本の構想』(岩波書店)『ポスト福祉国家とソーシャル・ガバナンス』(ミネルヴァ書房) ほかがある。

岩田三枝子 (いわた・みえこ)

東京基督教大学准教授。東京基督教大学神学部卒業。東京基督神学校、カルヴィン神学校、キリスト教高等研究所、東京基督教大学大学院博士後期課程修了。神学博士(Ph.D.)。専攻はキリスト教公共哲学、キリスト教世界観、賀川ハル研究。「大正期における婦人運動—覚醒婦人協会と賀川ハルを中心に」により第10回平塚らいてう賞奨励賞。著書に『評伝 賀川ハル—賀川豊彦とともに、人々とともに』(不二出版)、共訳書に R・J・マウ『アブラハム・カイパー入門』(教文館) ほかがある。

コーディネーター

稲垣久和 (いながき・ひさかず)

公共哲学、キリスト教哲学専攻。東京基督教大学特別教授・公共福祉研究センター長。東京都立大学大学院博士課程後期修了(理学博士)。アムステルダム自由大学哲学部客員研究員、同客員教授、東京基督教大学大学院教授等を経て現職。著書に『宗教と公共哲学』(東京大学出版会)『国家・個人・宗教』(講談社現代新書)『実践の公共哲学』(春秋社)『「働くこと」の哲学』(明石書店)『日本型新自由主義の破綻—アベノミクスとポスト・コロナの時代』(土田修との共著 春秋社) ほかがある。

ブローチャ
Kyoritsu Brochure 008

共立パンフレット

2021年1月31日

発行人 倉沢正則
編集 高橋伸幸・中田有紀
編集協力 渡辺弘之
デザイン 澤地真由美
印刷・製本 Print Bank

写真協力 賀川豊彦記念松沢資料館

東京基督教大学 共立基督教研究所
〒270-1347
千葉県印西市内野 3-301-5-12
telephone 0476-46-1137
facsimile 0476-46-1292
E-mail kci@tci.ac.jp
URL <http://www.tci.ac.jp/info/kci/kci>

Kyoritsu Brochure

number **008**

Tokyo Christian University | Kyoritsu Christian Institute

